論文（*Article*）

阪神・淡路大震災の記憶継承のための実験番組の制作と震災後世代による番組評価

～「人間が語り継ぐ阪神・淡路大震災」「データで語り継ぐ阪神・淡路大震災」に関する視聴反応調査報告～

Experimental Programs to Pass on the Memories of the Great Hanshin-Awaji Earthquake and Evaluation of the Programs by the Post-disaster Generation: Report on Viewer Survey of *The Human Stories of the Great Hanshin-Awaji Earthquake* and *What the Data Say About the Great Hanshin-Awaji Earthquake*

山中　速人[1]・照本　清峰[2]・津田　睦美[3]・奈良　雅美[4]・金　千秋[5]
Hayato Yamanaka, Kiyomine Terumoto, Mutsumi Tsuda, Masami Nara, Chiaki Kim

The year 2020 marked a quarter century since the Great Hanshin-Awaji Earthquake. More than ever, effectively passing on the memory of the disaster to post-disaster generations has become a matter of major concern. With this in mind, a joint research group formed in fiscal 2021 produced two different types of experimental programs on the Great Hanshin-Awaji Earthquake, had them viewed by members of the post-disaster generation, and then surveyed the viewers on their reactions and evaluations of the programs. This paper reports on the surveys made on the two programs: (1) *The Human Stories of the Great Hanshin-Awaji Earthquake* (14 min 36 sec) and (2) *What the Data Say About the Great Hanshin-Awaji Earthquake* (19 min. 45 sec.). Program (1) focused on disaster survivors telling their own stories without the aid of visual records or data while program (2) presented objective facts and data using figures and tables. The results showed that the audience felt empathy with the survivors appearing in program (1), saying they were deeply moved and reassured, and felt the narratives to be refined and eloquent. In response to program (2), they said that they were strongly impacted by the data even as they learned about the disaster and disaster prevention. An analysis of the respondents' comments on the survey form showed that this strong impact included feelings of fear and anxiety. In conclusion, it was confirmed that for the effective passing on of disaster memories, presenting objective facts is not enough, and that survivors' narratives play a critical role in fostering empathy and encouraging cooperation in implementing disaster prevention measures and supporting the community.

キーワード：阪神・淡路大震災、災害記憶、震災後世代、集合的記憶、番組評価

Key Words： The 1995 Southern Hyogo Earthquake, Disaster Memory, Post-quake Generation, Collective Memory, Program Evaluation

---

1　2020年度総合政策学部共同研究「阪神・淡路大震災の記憶継承に関する大震災後世代の意識調査、および地元コミュニティ放送局との災害記憶継承番組の共同制作」研究代表者、関西学院大学総合政策学部教授（当時）
2　同研究分担者、同学部教授（当時）
3　同研究分担者、同学部教授
4　同研究分担者、同学部非常勤講師
5　同研究協力者、特定非営利活動法人エフエムわいわい代表理事

A. はじめに

2020年は、阪神・淡路大震災の発災からすでに４半世紀を迎え、その震災記憶の継承をいかに進めるかが喫緊の課題となっていた。そして、その課題は2022年の現在においても引き継がれている。この2020年に先立つ2019年、被災地の震災後世代を対象に、関西学院大学総合政策学部（学部指定の共同研究プロジェクト）と阪神・淡路大震災の被災地域のコミュニティ放送局（NPO法人エフエムわいわい、神戸市長田）が共同して、震災記憶の継承について、震災後世代として総合政策学部学生を対象とした小規模の意識調査（有効回答445サンプル）を実施した。調査では、一部、少数ながら被災地の大学２校（神戸大学、神戸常盤大学）からも回答をえた。この調査の結果と詳細な分析については、すでに本研究誌に論文として発表公開されている。[6]

この先行調査の調査結果は非常に興味深いものであった。そもそも、災害記憶についての研究は、被災者自身に対するものが大半で、次世代による継承に焦点を当てた研究は、まだ未開の分野であった。この先行的調査によって明らかになった知見は、震災後世代が震災について知識や情報を得る回路は、おもに当事者／家族、学校教育、映像音声メディアという３つであること。また、災害後世代は記憶継承に強い義務感を持ってはいるが、その関心領域には偏りがあり、また、どのような記憶を継承すべきか／したいかについても偏りがあることであった。①災害の人的側面より物質的側面の記憶に関心が高く、また②防災や避難などの実用的記憶の継承には積極的だが、他方、③犠牲者の苦難や悲劇的記憶の継承には消極的であり、いわば「災害記憶の選択的継承」という現象が存在していることであった。また、震災にまつわる記憶の継承については、事実にもとづく客観的データなどの記録の継承により強い関心を示したが、他方、それと比較して、被災者個人の体験や心情などの記憶継承に対する関心は低いという傾向が認められた。

この調査結果が示唆する震災後世代の震災記憶継承についての選択的傾向、とりわけ、人間の体験によって形付けられた記憶の継承より客観的事実やそれを記録したデータの継承を重視するという態度については、重大な課題を内包しているように想われた。

ユダヤ系フランス人であり、第二次大戦下のナチスによる迫害によって、強制収容所において殺害された社会学者モーリス・アルヴァックスは、人間の記憶における集合性に注目し『集合的記憶』[7]を著したが、この著作においてアルヴァックスは「実際に出来事についての何の思い出ももたず、ただ歴史的観念だけにとどまっていたとしたら、…その際介入してくるのは抽象的知識であって、記憶ではない」と論じている。つまり、アルヴァックスのいう歴史的観念をここで阪神・淡路大震災に関する諸事実の歴史的記録と置き換えてみれば、それは記録ではあっても、人間にとっての記憶というには不十分であるということであろう。

このような視点にたてば、持続的かつ多様な災害記憶の継承のためには、震災後世代の震災記憶の継承についての意識や態度の偏りを補うような積極的な働きかけが必要であることを示唆していた。

大震災という歴史的大災害の記憶は、このような問題意識をもって、同共同研究班は、実際に阪神・淡路大震災の記憶継承を目的とするいくつか

6　山中速人、照本清峰、奈良雅美、金千秋「阪神・淡路大震災の記憶継承に関する震災後世代の意識と態度～調査報告 (基礎編)」『総合政策研究/Journal of policy studies』、61号、pp.47-69 (2020-09-20)
山中速人、照本清峰、津田睦美、奈良雅美、金千秋「阪神・淡路大震災の記憶継承に関する震災後世代の意識と態度～2019年度調査の分析」『総合政策研究/Journal of policy studies』、64号、pp.73-94 (2022-03-20)

7　モーリス・アルヴァックス『集合的記憶』小関藤一郎訳、行路社、1989年、p.74

の性格の異なる研究実験番組を制作し、それを実際に震災後世代のオーディエンスに視聴してもらい、それらの番組に対する反応や評価を調査する実験的研究を実施した。

B. 大震災の記憶継承のための実験番組の制作と番組概要

2020年に実施した震災後世代に対する震災記憶継承に関する意識態度調査結果にもとづいて、研究班は、大震災の記憶を継承する実験番組として、３つの異なった特徴をもつ動画の制作を行った。①「データで語り継ぐ阪神・淡路大震災」(19分41秒)、②「人間が語り継ぐ阪神・淡路大震災第一部」(14分36秒)、「同第二部」(13分44秒)、③「映像で語り継ぐ阪神・淡路大震災」(10分55秒)の３つである。

①の「データで語り継ぐ阪神・淡路大震災」は、客観的事実とデータに特化し、映像や被災者による被災体験の語りなどを極力排除し、数値や図表などを駆使した事実表現を中心にした動画番組である。震災後世代の意識調査では、震災の記憶継承に関して、震災後世代は客観的データを重視する傾向が読み取れたので、この傾向を強く反映した動画を作成することにした。

番組で使用されたデータは、神戸新聞社がウエッブ上に開設している阪神・淡路大震災の情報資料サイトである「神戸新聞NEXT　データでみる阪神・淡路大震災」[8]など、阪神・淡路大震災を記録する書籍やウエッブ上の資料[9]にもとづき、それらを番組で使用できるようあらためてグラフや図表を作成し構成したものである。図表やグラフのデザインと作成は、宗田宜士氏が担当し、また、ナレーションは男性声を森崎清登氏、女性声をはまのかずみ氏が担当した。最終的な編集作業は、山中が担当した。番組の時間長を20分以内に収めるよう努めたが、最終的な番組の時間長は、19分41秒になり、今回制作した３つのタイプの番組の中では、最も長いものとなった。

②の「人間が語り継ぐ阪神・淡路大震災第一部」は、震災経験の被災者自身による語りをモノローグの形式で記録した映像である。この番組は、いわゆる災害の「語り部」によるモノローグの映像であり、震災の状況を撮影した記録写真やビデオ映像や図表やグラフなどを一切挿入せず、震災体験を語る人間のみが登場する形式を採用した。この番組は、第一部、第二部の二部構成をとり、第一部では、語り部として、長田区在住のMさん(日本人男性)を招き、自身の震災体験をカメラの前で語っていただき、第二部として、長田区在住のRさん(日系ペルー人女性)を招き、日本とは異なった文化背景をもつ女性自身の震災体験をカメラの前で語っていただき、それぞれを収録、編集して番組を制作した。収録は、被災地である長田区鷹取に所在するカトリックたかとり教会の聖堂にて行われ、聞き手としてFMYYの金千秋氏(本研究班メンバー)を配し、撮影と編集を映像作家の神吉良輔氏に依頼した。

被災者の語り自体は、１時間を超えるものであったが、それらを編集し、番組の時間長を前者が14分36秒、後者が13分44秒とした。番組の時間長を比較的短くしたのは、視聴反応調査を実施する際、視聴者の異なったタイプの番組を視聴することを求めるため、視聴する番組全体の視聴時間と調査への回答時間を合わせて、60分を超えないよう配慮したためである。

③の「映像で語り継ぐ阪神・淡路大震災」は、震災当時、撮影され、利用が許可されている記録映像に加え、さらに、この番組のために新たに撮影された映像群を素材として、映像による震災記憶の継承に特化した番組である。ナレーションや人

8　https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/sinsai/graph/index.shtml
9　使用した資料の出典については、それぞれ出現箇所に表示し、巻末の参考文献リストにまとめた。

間による語りはなく、背景音楽も最小限に制限し、もっぱら視覚的印象によって震災の記憶の継承を試みた。番組の時間長は、10分55秒と最も短い番組となっている。素材として活用した映像は、震災当時の記録映像としては、神戸市が保存公開する映像アーカイブ「震災復興映像クリップ」、FMYYが独自に所有する映像アーカイブ、さらに、ドローンやスタビライザーによる映像撮影技術をもつ辻野賢登氏によって撮影されたものである。

なお、この③「映像で語り継ぐ阪神・淡路大震災」は、今述べたように、あくまで試作的な番組として制作を行ったものであり、よって、今回の視聴反応評価調査の対象からは、除外した。

C. 調査対象となった実験番組の内容

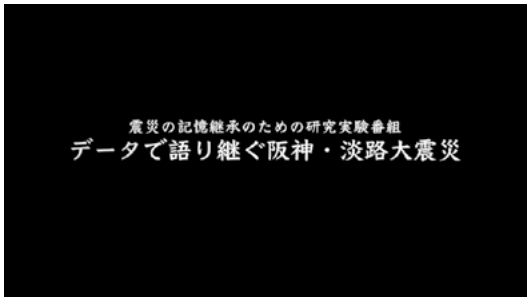
今回の視聴反応・評価調査の対象となった２つの番組「データで語り継ぐ阪神・淡路大震災」と「人間が語り継ぐ阪神・淡路大震災」について、その内容を紹介したい。

まず、これら２つの番組は、すでにyoutube上で公開されている。それぞれのURLとQRコード※を脚注に示した。[10]参照されたい。本論では、もっぱら文字情報と写真・図表でその内容を概説することにしたい。

C-1.「データで語り継ぐ阪神・淡路大震災」

まず、最初に「データで語り継ぐ阪神・淡路大震災」を構成台本をもとに、番組中で使用された図表やグラフを順に提示しながら、ナレーションとともに以下再録する。

オープニング・タイトル



地震の巨大なエネルギー

（男声）1995年１月17日午前５時46分、観測史上初めての震度７を記録する地震が、私たちが住む兵庫県南部に発生しました。

（女声）この地震は、その後、「兵庫県南部地震」と正式に命名されましたが、地震直後の２月14日、当時の政府は、この地震を特別に「阪神・淡路大震災」と呼ぶことを決定しました。図は、震度の分布を示しています。震源地を中心に、地震の揺れは、日本列島の西側全体に広がりました。

[11]

震度７と判定

（男声）「神戸には地震がない」という、神戸っ子の神話は、無残に打ち砕かれました。

10 「データで語り継ぐ阪神・淡路大震災」https://youtu.be/yz3OiyCSUOo

「人間が語り継ぐ阪神・淡路大震災・第１部」https://youtu.be/GNWQBa2nV8o

11 震災発：DATA阪神・淡路大震災－兵庫県南部地震の概要（https://www.shinsaihatsu.com/data/gaiyo.html）

（女声）地震の震源地は、ちょうど淡路島の北の端にあたる北緯34度36分、東経135度02分の地点でした。震源の深さは、地表よりおよそ16キロメートル。

淡路島北部から海を渡って神戸市須磨区、芦屋市、西宮市、宝塚市へと連なる活断層に貯められた巨大なエネルギーが、一気に放出されました。

図は、震度７のエリアを示しています。震度７のエリアが断層にそった地域に集中していることがわかります。

（男声）長田区もこの震度７のエリアに含まれ、はげしい揺れに襲われました。

12

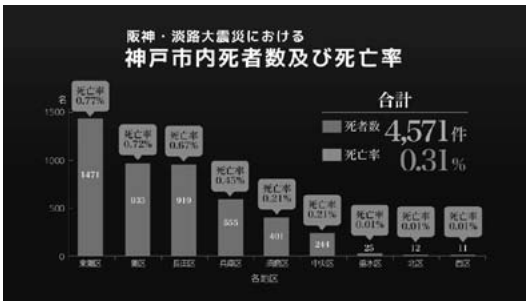
未曾有の被害

（男声）地震で家や建物が倒れ、多くの人命が失われました。

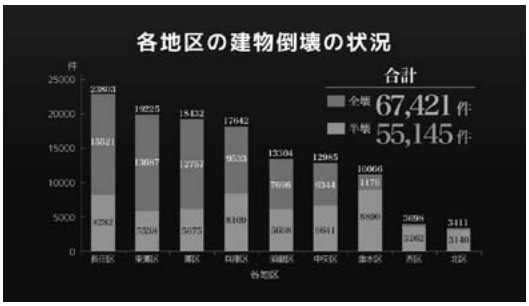
（女声）この地震による死者は、関連死を含めて6434人。住宅への被害は、約64万棟にもおよびました。 厚生労働省の調査では、地震が発生してからその年の６月までに亡くなった死者のうち、窒息や圧死が原因の死者が、77％に達しました。

（男声）神戸市の中でも、長田区は被害の大きかった区のひとつでした。

（女声）このデータは、神戸市の各区別の死者数と建物の被害状況を示しています。長田区は、死者数が919人。これは人口あたりの死亡率でみると東灘区、灘区につぐ大きさです。また、建物の被害では、全壊が１万5521件、半壊が8282件と、長田区は、市内でもっとも被害が甚大でした。



13



14

12　神戸新聞NEXT「データでみる阪神・淡路大震災」(https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/sinsai/graph/)
13　神戸新聞NEXT「データでみる阪神・淡路大震災」(https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/sinsai/graph/)
14　神戸市ホームページ(https://www.city.kobe.lg.jp/a21572/bosai/shobo/hanshinawaji/higai2.html)

大規模火災の発生

(男声)地震の直後から各地で大小の火災が発生しました。

(女声)神戸市内では、地震直後から火災が発生し、その後の10日間に、175件の火災が発生しました。

このデータは、神戸市の地震による火災発生状況を各区別に示しています。中でも、長田区の火災による被害が大きかったことがわかります。長田区の火災で焼け落ちた延面積を合計すると、52万4000平方メートルにも及びました。これは、神戸市全体の火災で焼け落ちたのべ面積81万9000平方メートルの64パーセントに当たりました。

(男声)長田区では、火災によって255名の方が亡くなりました。長田区で火災による被害が大きかった原因には、地場産業であるケミカルシューズの製造に使われるゴム製品に火が移って火災が拡大したこと、倒れた建物が道路をふさぎ、火が次々と燃え広がったこと、ガス漏れが発生したことなどがありました。

区名	1月17日	～1月26日	合計	焼損面積（㎡）
長田区	17	10	27	303,558
兵庫区	17	11	28	127,055
須磨区	13	7	20	98,552
灘区	17	5	22	65,559
東灘区	17	11	28	32,896
中央区	20	15	35	14,542
垂水区	6	5	11	175
西区	1	1	2	77
北区	1	1	2	54
合計	109	66	175	642,456

15

被害額

(男声)阪神淡路大震災は、神戸という大都市を襲った直下型の地震でした。そのため、現代都市の機能は失われ、経済が破壊されました。

(女声)住宅、商業施設、工場などの建築物の被害額は約５兆8000億円、また、道路や港の施設などの公共的な社会基盤の被害額は約２兆2000億円、電気・水道・ガスなどのライフラインの被害額は約6000億円。これらを合わせると、被害総額は、約９兆9000億円に達しました。

16

避難者

(男声)地震を生き延びた被災者にとって、避難先の確保は、差し迫った大問題でした。

(女声)このデータは、阪神・淡路大震災における避難所の変遷をしめしています。

震災６日目の１月23日の時点で、1153の施設に31万6678人が避難していました。地域防災計画であらかじめ避難所として指定されていた学校などの公共施設では足りず、多くの避難者が、指定外の公園や民間の施設に避難しました。

震災直後は30万人以上の人が避難所に避難し、震災後１ヶ月後の時点では、まだ20数万人の避難者が避難所にとどまっていました。

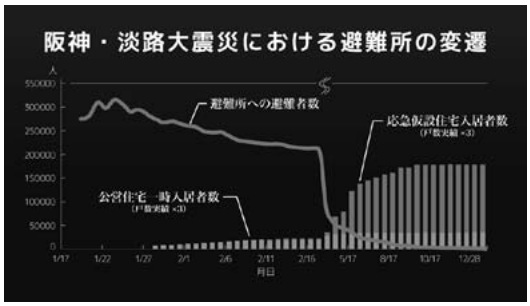
しかし、その後、公営住宅や「仮設住宅」への入居などによって、避難所に留まる避難者は、震災後１ヶ月後以後、徐々に減っていきました。それでも、４ヶ月後の５月になっても、５万人の被災者が避難所で生活

15　神戸市消防局「阪神・淡路大震災」(https://www.city.kobe.lg.jp/a21572/bosai/shobo/hanshinawaji/index.html)
16　神戸新聞NEXT「データでみる阪神・淡路大震災」(https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/sinsai/graph/)

していました。

そして、最終的に全ての「避難所」が閉鎖されたのは９ヵ月後の10月のことでした。

(男声)長田区では最大で84ヶ所の避難所が開かれ、６万6,000人を超える避難者が避難しました。震災直前の長田区の人口13万人弱の約50％を超える人々が避難したことになります。



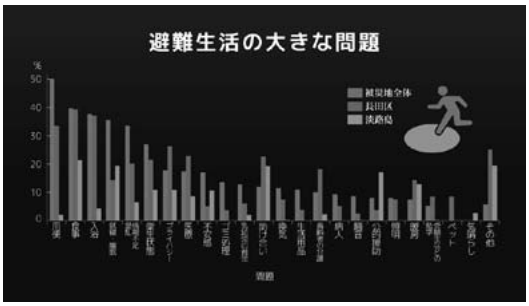
17

避難所の問題

(男声)避難所では、さまざまな問題が起こりました。

(女声)このデータは、避難所がどのような問題を抱えていたかを示しています。

当初、指定外の避難場所に食べ物などの救援物資が届けられないというトラブルもありました。また、避難所では、さまざまな生活上の問題が起こりました。トイレ、食事、入浴、睡眠など人間生活にとって不可欠な要素が不足し、また、情報不足、衛生状態の悪化、プライバシーのなさ、医療サービスの不足も深刻でした。また、長田区のように国籍や文化の異なる人々が暮らしていた地域では、文化や国籍に対する配慮がゆきとどかないなどの問題も起こりました。しかし、避難者自身やボランティアたちによる自助組織が動き始めたこともあり、避難生活の問題は少しずつ改善されていきました。



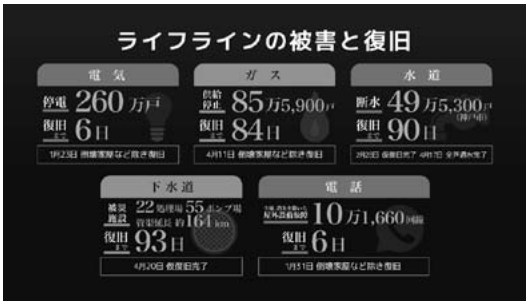
18

寸断されたライフライン

(男声)被災地で暮らす被災者の困難は、続きました。

(女声)電気、ガス、水道などのライフラインの復旧には時間が必要でした。水道が使えない、電灯が点かない、電話が掛からない。そんな生活が被災者を苦しめました。

このデータは、ライフラインの被害をまとめたものです。



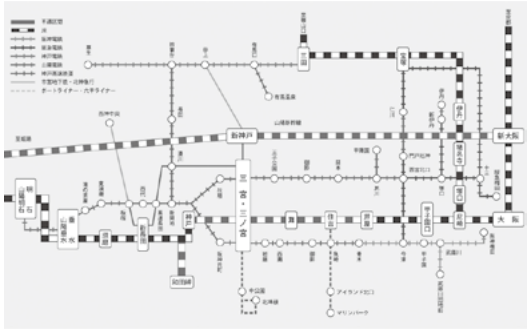
19

電気は260万戸が停電し、普及に６日かかりました。水道は、神戸市で約50万戸が断水し、復旧には３ヶ月。ガスは、約85万6000戸の供給が止まり、復旧に84日かかりました。復旧をまつ被災者たちのために、多くの関係者が必死の努力を続け、復旧にこぎつけました。

17 内閣府防災情報のページ「阪神・淡路大震災における避難所の変遷」(https://www.bousai.go.jp/kyoiku/kyokun/hanshin_awaji/data/)
18 柏原,土郎他『阪神・淡路大震災における避難所の研究』大阪大学出版会、1998年
19 神戸新聞NEXT「データでみる阪神・淡路大震災」(https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/sinsai/graph/)

交通網

(男声)地震の揺れによって、鉄道や道路も、破壊され寸断され、人々の社会生活や経済活動に重大な影響を与えました。



20

(女声)この図は、震災直後の鉄道の被害状況を示したものです。
被災地を東西に通過する鉄道や道路が甚大な被害を蒙りました。
JR線は六甲道駅の駅舎が倒壊し、阪神電車は８箇所で高架橋が壊れて地面に落下し、阪急電鉄は伊丹駅の駅舎全体が崩壊しました。
これら３本の鉄道が使えなくなったことで、一日45万人の足が奪われました。また、山陽新幹線も不通になりました。
これらの鉄道がすべて復旧するまでに、約７ヶ月がかかりました。

(男声)長田区でも、JR線は神戸駅より西へは動いていましたが、山陽電鉄、神戸高速鉄道、神戸市地下鉄が全面的に不通になりました。

高速道路網の破壊

(男声)道路網の破壊は、さらに深刻でした。

(女声)阪神間を東西に貫く幹線道路の、阪神高速道路神戸線などが被害を受けました。図は、高速道路の被害と復旧時期を示しています。中でも、被害が大きかったのは、阪神高速神戸線で、神戸市東灘区で橋脚が折れて約600メートルにわたって倒壊しました。それ以外にも、中国自動車道、名神高速道路、第二神明道路、阪神高速道路北神戸線、湾岸線が被害を受け、通行できなくなりました。これらの道路網が復旧するまで、622日を要しました。

21

救助活動

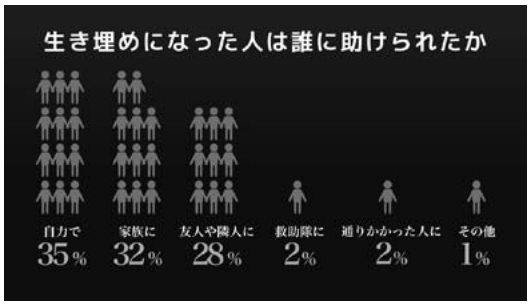
(男声)地震直後から、命を救う救助活動が懸命に続けられました。

(女声)地震直後、数万人もの生き埋め者が発生しました。被災の激しかった地域では、電話が利用できず、消防署や警察署に駆け込んで救助を要請する人々が殺到しました。現場では、人員、救出用資材や機材が決定的に不足していました。被災地の外からは、自衛隊、警察や消防の応援部隊が派遣されましたが、互いの連携不足のため、効果的な救助ができませんでした。
一方、市民、地元の消防団による救出が多くみられました。救出活動には大きな労力と時間がかかり、危険も伴いました。

(男声)長田区では、救出作業中に火災が迫り、生き埋めになった人を置いて避難しなければならなかった悲劇も起こりました。

20　神戸新聞NEXT「データでみる阪神・淡路大震災」(https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/sinsai/graph/)
21　神戸新聞NEXT「データでみる阪神・淡路大震災」(https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/sinsai/graph/)

（女声）このデータは、生き埋めになった人が誰に助けられたかを示しています。巨大災害が発生した時、行政による救助には限界がある一方、自力や近隣の助け合いが重要であることがわかります。



22

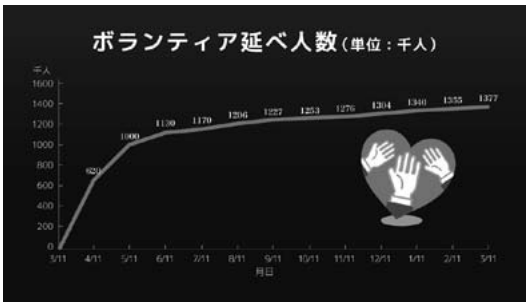
ボランティア

（男声）被災者を手助けするために、全国からたくさんのボランティアたちが駆けつけました。

（女声）このデータは、被災地に駆けつけたボランティアの述べ人数の推移を示しています。一年で138万人ものボランティアが被災地に入り、多い日で一日２万人が活動しました。当初、ボランティアたちは、瓦礫の撤去、食糧や物資の配布などに関わり、その後、仮設住宅にすむ高齢者の介助などへと活動を広げました。これらの活動から、今日、日本の災害ボランティアの中心となる民間団体が生まれました。

1995年は、日本の災害ボランティアの元年といわれています。

（男声）長田区でも、数多くのボランティアが活動しました。西神戸YMCA、長田支援ネットワーク、カトリックたかとり教会などがリーダーシップをとり、ボランティアを組織しました。

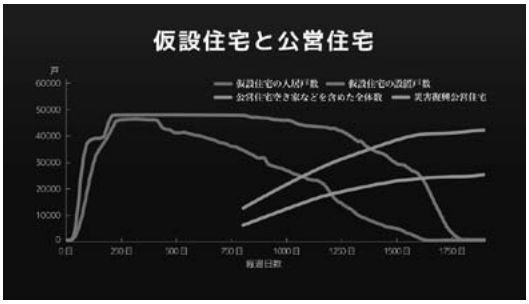


23

仮設住宅の建設と問題

（男声）地震発生の３日後から被災地では仮設住宅の建設が始まりました。

（女声）このデータは、被災地に供給された仮設住宅や災害復興住宅の推移を示しています。兵庫県では全部で8300の仮設住宅が建設されました。



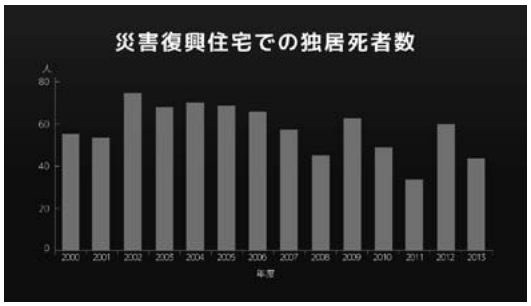
24

仮設住宅や災害復興公営住宅は、さまざまな問題を抱えていました。まず、入居が抽選で行われたため、住み慣れた地域に根付いていた人間関係が失われました。このデータは、災害復興住宅での孤独死の推移を示しています。公営住宅には高齢者の入居が多く、孤独死などの深刻な問題が、起こりました。

（男声）長田区でも、神戸市民球場跡地 仮設西代住宅や14箇所、総数647戸の仮設住宅が建設され、住宅を失った被災者の多くが、仮

22　日本火災学会編『1995年兵庫県南部地震における火災に関する調査報告書』日本火災学会、1996年
23　内閣府、「阪神・淡路大震災教訓情報資料集【01】ボランティアの種類・活動内容、」『防災情報のページ』
24　神戸新聞NEXT「データでみる阪神・淡路大震災」(https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/sinsai/graph/)

設住宅に移りました。



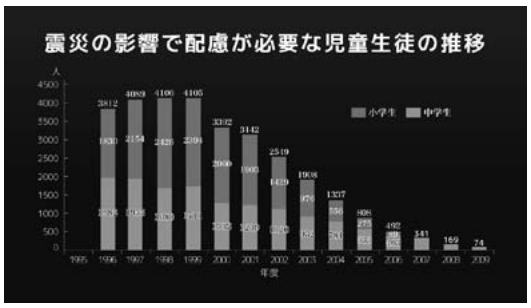
25

こころのケア

(男声)心理的なストレスが原因となって、さまざまな心の障害が現れる被災者もいました。

(女声)被災者や子どもたちに、そして、過酷な救援現場を経験した消防署員らに、地震の夢をみて飛び起きる、不安や恐怖に突然襲われるなどのこころの症状が現れました。トラウマやPTSD心的外傷後ストレス障害などと呼ばれる症状です。

このデータは、震災が原因で心のケアが必要になった子どもの数を示しています。これらのケアに取り組むため、兵庫県こころのケアセンターが設置されました。しかし、こころのケアが必要なこどもが減少に転じるまでに5年の年月がかかりました。そして、今後も、注意深いケアが必要とされています。



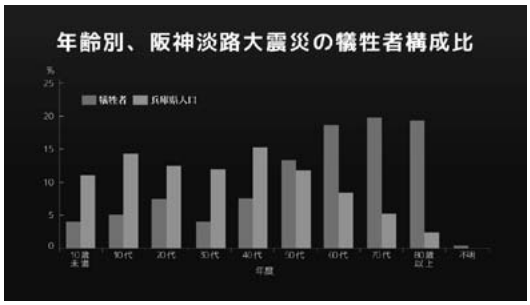
26

弱者やマイノリティの被災と支援

(男声)被災者の中に、とりわけ災害の被害を受けやすい人々がいることも、明らかになりました。高齢者、女性、障害者、出身文化や国籍が異なる人たちなど、災害弱者と呼ばれる人たちです。

高齢者の被害

(女声)このデータは、震災の犠牲者を年齢別に集計したものです。60歳以上の高齢者が飛び抜けて、災害の犠牲になったことがわかります。



27

女性の被害

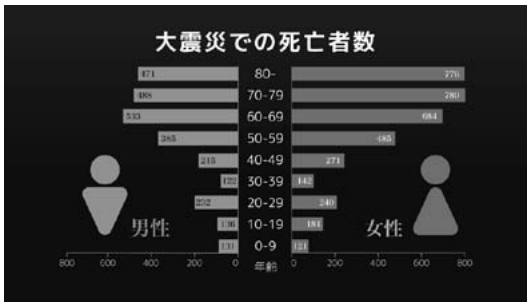
(女声)このデータは、大震災で亡くなった女性の比率を年齢別に集計したものです。ほとんどの年代で、女性がより多く犠牲になったことがわかります。その原因には、育児や介護などの家庭内の役割が関連したといわれています。

さらに、災害や避難の混乱に乗じたセクシャルハラスメントやレイプなどの性的被害も起こりました。表面にでにくいその被害実態は、今でも十分に解明されていません。

25 神戸新聞NEXT「データでみる阪神・淡路大震災」(https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/sinsai/graph/)

26 神戸新聞NEXT「データでみる阪神・淡路大震災」(https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/sinsai/graph/)

27 兵庫県：阪神・淡路大震災の死者にかかる調査について(平成17年12月22日記者発表)，http://web.pref.hyogo.jp/pa20/pa20_000000016.html，2005(2011年6月14日参照)

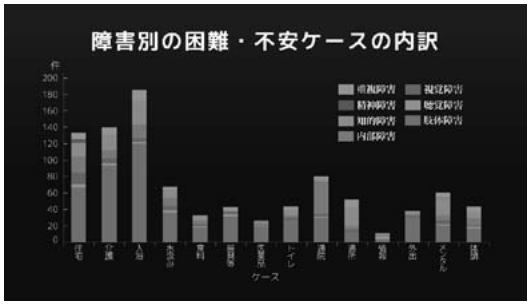


28

障害者の被害

(女声)震災で犠牲になった障害者には、8月末の時点で、226人でしたが、在宅で暮らしていた障害者の比率が高かったといわれます。

このデータは、大震災後、2902人の障害者に行われたアンケート調査の結果です。これをみると、災害時に障害者の抱える困難は深刻で、とくに住宅、介護、入浴、通院などで不安や困難を抱えていることがわかりました。

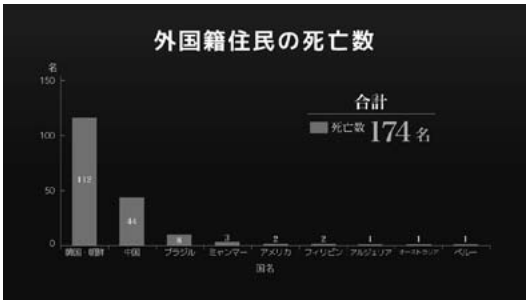


29

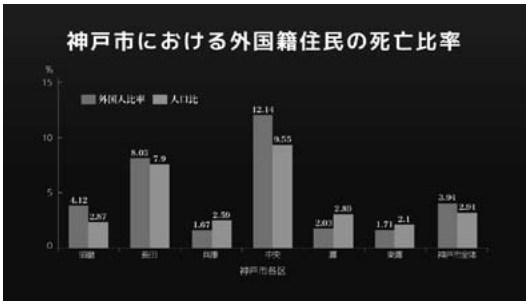
外国人の被害

(女声)国際的な港湾都市、神戸とその周辺には、たくさんの外国籍住民が暮らしていました。大震災はそれらの人々も直撃しました。

このデータは、大震災でなくなった外国籍住民の国籍別の人数と、神戸市における外国籍住民の死亡数を各区別に示したものです。



30



31

戦前の日本の植民地統治と深い関係をもつ在日コリアンや中国人の死亡者だけでなく、中南米や東南アジア出身者など、さまざまな人々が犠牲になりました。外国籍の被災者には、言葉や文化の壁のために、つらい経験をした人もたくさんいました。

(男声)長田区は、神戸市内では中央区に続いて、多くの外国籍住民の犠牲者がでました。震災後、その反省にたって、すべての人が理解できる、ユニバーサルデザインのまちづくりをはじめました。

(女声)高齢者、女性、障害者、外国人などの災害弱者の経験をいかして、弱い立場にある人々を取り残さず、等しく支援の輪に組み

28 舞田敏彦「災害での死者数は、なぜ女性の方が多いのか」『ニューズウィーク日本版』2019年10アク的安全な月23日(https://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2019/10/post-13240.php)
29 人と防災未来センター『資料室ニュース』30号、2006年11月15日
30 総務省多文化共生の推進に関する研究会『災害時対応を通して考える多文化共生』NPO法人 多文化共生センター大阪、2012年
31 総務省多文化共生の推進に関する研究会『災害時対応を通して考える多文化共生』NPO法人 多文化共生センター大阪、2012年

入れるための新しい包括防災の考え方が進められるようになりました。

地域社会と経済の復興と課題

（男声）震災によって破壊された街や産業の復興が進められました。

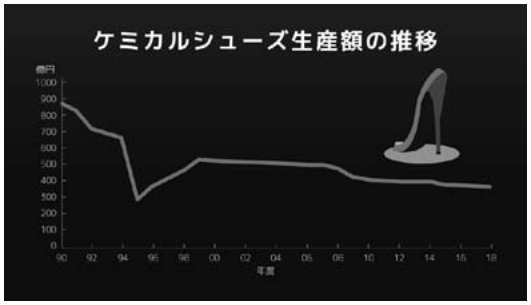
（女声）被災地の各地で、区画整理や都市の再開発が開始されました。

区画整理は20地区で進められ、再開発は、６地区で事業が行われました。このデータは、これら再開発事業の概要を示しています。

32

（男声）長田では、JR新長田駅南地区で再開発事業が行われました。しかし、事業は遅れ、その結果、震災前の賑わいがなくなるなど、多くの問題が残りました。また、地場産業の回復も進んでいません。

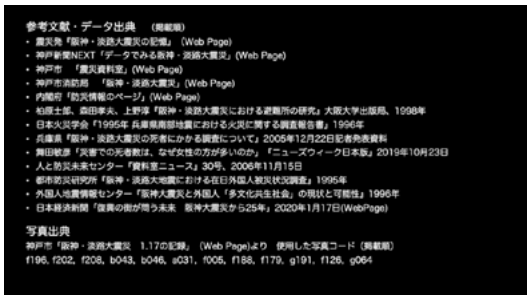
長田では、地場産業のケミカルシューズの生産額は、震災前の６割に届いていません。



33

（男声）地域社会の復興には、まだまだたくさんの課題が残されています。これらの課題が解決されたとき、はじめて震災から復興ができたといえるのではないでしょうか。私たちは、まだまだ、その道のりの半ばにいるのだと思います。

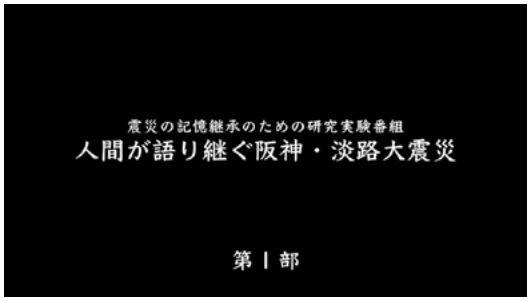
エンドロール



C-2.「人間が語り継ぐ阪神・淡路大震災」

つぎに、「人間が語り継ぐ阪神・淡路大震災」について、その内容を紹介したい。この番組は、すでに述べたように、被災経験者、いわゆる「語り部」によるモノローグのみを収録した映像である。よって、ここでは、その「語り部」による語りを文字起こしした文章に若干の写真と静止画を加えることによって、その内容を概説することにする。

オープニングタイトル



32 神戸新聞NEXT「データでみる阪神・淡路大震災」(https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/sinsai/graph/)

33 日本経済新聞「復興の街が問う未来 阪神大震災から25年」2020年１月17日(https://vdata.nikkei.com/newsgraphics/great-hanshin-earthquake-25/)

オープニング映像（カトリックたかとり教会聖堂）

被災経験者（森崎清登氏）によるモノローグ

森崎清登と申します。住まいはちょうど長田の街の鷹取山という山があります。その麓で住んでおります。震災のときは、そちらの方で揺れを体験しました。

はじめ地震と思わなかったんですね。何か大きな爆弾でもね、落ちたんだろうと…。

子どもが宝ですから、その上に覆いかぶさってですね。屋根が落ちてきても、大丈夫ではないだろうけれども、とにかく、子どもを守ろうという…。

で、隣の部屋の襖ですけどね、パッと開けますとね、四方の箪笥が全部倒れてましてね。それをこう、跨ぎ跨ぎ…。

あ、二階なんですけどね、一階に降りましたら、テレビは跳んだようにひっくり返ってるわ、冷蔵庫も倒れてるわという…。何から手を着けていいか分からんので、ま、人間あんな風になりますとね、片付けようという気はなくて、とにかく、当たり前のことですけど、自分の体、家族の体の方が、えー、命の方が心配になりますから、それを何とかせんとあかんということで、きたんですけれどね。床にもガラスが割れているんで、近所も同じようなもので…。

ただね、ご近所の奥さんが、直後だったですよ「みなさーん、大丈夫ですかー」という奥さんの声が…女性の声が、聞こえましてね。で、家内がどこどこの奥さんやー。そしたら、ご近所の方で「大丈夫でーす」と声が上がったりね。

あの時ね、あ！みなさん大丈夫だということもあるけども、あの、ホッとしましたね。

人の声が聞こえるというのがね、自分たちでまったく孤立しているというわけでないですけども、あの時の声掛けというのは、今、思ってもなかなかできることやないんだけども、それは誰に、私に向かって言ってるわけやないけども、それを聴いた私は、とても安心した。そんなことを今、やっぱり人間覚えてますね。25年前のことも、ええ。

そうこうしてましたら、まさにあの…ぼくの馴染みのある長田の街の方から煙が上がっていて、それは一本のものじゃなくて、こうずーとですね、幅広い煙が上がってましたですね。

これは大変なことになってる。自転車で行くとね、ま、掛けて行ってもいいですよ…掛けて行っても、15分も掛けていくと、その地域には降りていけるんだけども、まー、私は降りていく勇気がなかったのかな。

で、幸いにも、テレビが点いてましてね。電気が通ってた…その当時。えー、ようやく昼過ぎぐらいから映像が、テレビの映像が始まりました。

したら何と、私が子どもの頃に…実は、千歳町とか鷹取市場の周辺に僕は生まれ育ちましたのでね。そこがですね。日吉町とか、そういうところが、自分が子どもの頃に遊んだところとかというのは、やっぱり覚えていますからね。

そうしたら、本当に角っこの…なんかこういう石塀とか、そういったものが確かにある。そこに

火が点いているのが見えるんですよ。

リアルにそこに行けるのに、映像で見ている。

自分の街が焼けているのをテレビの前で見て、それをヘリコプターからパタパタパタと撮っている映像を見ている。

人間、言い訳するんです。今から行っても消しようがないしみたいなね…自分ひとりでは。

確かに、そのまま行ってないんです。

うーん、で…しかし、テレビで…。どこか遠いところの本当に行けないような場所をテレビで見るのは、まだしも…行けるところをテレビで見てしまうのは…。

それ、25年前ですよ。今だったら、これ(スマホ)でね…という世界になっていますよね。気をつけないと、実は何かそれで見てしまって、体験もなく、ニュースで見てみたいな…ことを感じた夜でしたね。

あのー、私と地域の繋がり方というのはね、本当にね、震災があってからの…なんだろう…繋がり方というのは、すごい…豹変がありましたけれども…濃厚なものになりましたですね。

でー、何かないですか？っという問いかけを実は5年間、震災直後からやったんです。何かできることないですか？何かないですか？…この言い回しをやってたら、誰も話を聞いてくれないんですよ。忙しいから。震災後のいろんなお仕事もあるし、自分の生活もあるし…。そんな僕がね、人が集まるところに行ってね、「何かないですか」って言ってね、名刺を渡してるんですよね。「あのー、近畿タクシーの森崎ですが…何かないですか」ですよ。

そんなとき、一生懸命言いまわっていて、ある時、ハッと思ったんですよ。何かないですかではね…「これ頼むわ」というのは、ないわけでね。「これができますけど」とかね、…具体的に自分ができることを言わないと…あの…こっち向いてくれない…というのを何年くらいやったかな。ある時、ふっと気がつきましてね。そうだと思って、自分のよく言うところの…強み…や、自分が持っているもので得意なもの…提供しようと思えば、すぐにできるもの…それでいて、他の人が十人いたら、十人のうち自分しかできないようなことってありますね。百人揃うと、似たような人はいますけれどね。そういうことを…無理なく自分がたまたま持ち合わせているものを提供したらいい。

私、タクシーなんで、車を持っていましてね。…その車を使ったら…「さー、それはちょっと商売道具だから」とか「自分を宣伝してるのと違うか」とかというので、遠慮していた部分があるのでね。…ところが、裸になってみると、僕にそれしかないんですよね。

そうしたら、十人いたらタクシーやってる人はないので、「これやりますよ」と言ったら、途端に「これやってくれ」「森崎！　あんた、これやってよ」…そうしたら「何かやれませんか？」という思いがあるから、すぐに引き受けるんですよ。…「やれますか？」「やれますよ」…「これ、できるやろか」言うたらね「できますよ」

言ってくる人は、僕のことをよく見ていて、この人やったらできるやろと思って、言ってくるんですよ。遮二無二、何も考えずに…無差別に、言ってくるんのじゃないわけで、この人、森崎に言ってくる。

だからやれることを言ってくるから、安心してできます。そうしたら、いろんなことができる…提供できるようになって、結果、自分の可能性…

自分ができる可能性って、自分ひとりでは、思いつかないんですよ…それができるとは。

何か抽象的言ってる…これができて、あれができて、みたいなね。…でも、人から言われて…依頼を受けて、「できます」と思いも着かないことをやれるんですよ。で、あれもこれもできるんです。

そんなことを繰り返して、やっているうちに、自分の持っている可能性がどんどんと広がってくるということに…気がつくんですよ。

実際、やっていくと、そこに、また、人がいてね。「これができるんやったら、あんた、これもできるやろ」と、（手を上へかざすように）こういうふうに広がっていきましてね。

そこで、初めて自分の持っている仕事…商売と言ってもいいのですけど…自分の仕事が生かされてくるんですよ。やり甲斐が生まれてくるんですよ。

それで、余計に拍車が掛かって、また、何か工夫をしようと思いますよね。

そういう中で、どんどんそれもね、とんとんとんと始まるんですよ。これを一回味わったら、人格形成にまで及びますよね。

私が言いたいのは、自分の持ってるものを外に出せるという機会が、みんなが困って、課題をいっぱい持ってる時に生まれてくる。

いっぱいリクエストが…その…あるわけですよ。今、この時点でなにか災いがありますよね。マスクをしないといけないという…見えない災いですよね。

ここから、この不安を、揺れではなくて、力に変えていくという…この動きは今からでもできます。誰もやったことがない。…それをやること自体が不安かもしれませんけれど、ただ、やってみる値打ちはある。

それは、「何かできないやろか」と問われた時に、もともと自分が持っているものを…ドアを開けて「これができます」と…半製品、まだ、未熟なものだと思いますよ、きっと。でも、向こうも未熟、でも、多くの人が未熟なものを持ち寄って、「さあ、これならどうや」

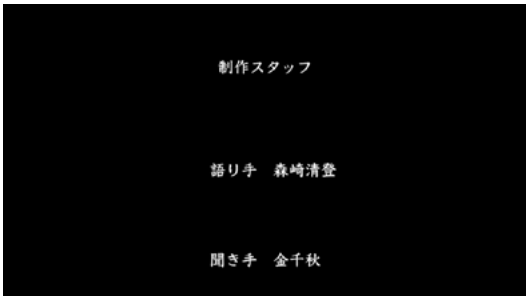
なにも、世界を相手にするわけじゃないですよ。始めは小さな場で、コンパクトな…仲間うちで集まってやろうかと…。そうしたら、「私は、お医者さん知ってるねん」とか…。病院にも医療従事者が「もうアカン」と言っている。「でも、アカンじゃ困る」という話をするわけです。そうしたら、そこで「これをやってくれたら、ちょっとでも助かるわ」というような話がでてきます。

そのちょっとが、実は、自分の持っているものであったりするものなんです。まったく使えないものはないんです。無駄なものは、一切、この世にはない。これまで生きてきた経験の中で、これは自分が持ってるなと醸成してきたものは、かならず使えるんです。

震災前の私と、震災後の私は、変わったといいますけれど…みなさんも、ぜひそういう意味においては、これまでのあなたとこれからのあなたは、変わったんだと…何か、杭をうつというか、鋲を打つというか、そういったことで歩みだしてほしいと思います。

そうすれば…世界のことまでは考えなくてもよろしい。でも、みなさん一人一人にとってすばらしい人生というか生涯が待っていると思います。

エンドロール



D. 視聴反応・評価調査の方法と実施

２つの番組の完成を待って、それぞれについて視聴反応・評価調査を行った。調査は、関西学院大学総合政策学部の学生(「メディア・リテラシー」科目受講者)を対象に、youtubeによる番組視聴とネットアンケートを組み合わせたオンライン手法を用いた第１調査と、神戸常盤大学の学生(「安全学」科目受講者)を対象に、教室での番組上映と自由記述形式による質問紙を用いた第２調査の２通りの方法によって実施された。

D-1. 第１調査(オンライン調査)

第１調査(オンライン調査)の質問項目は、選択肢による質問項目と自由記述による質問によって構成された。前者の選択肢質問項目については、おもにテレビ番組に対するインターネットを利用した視聴者評価調査に使われる質的評価尺度など[34]を参考に、防災に関連する項目を加え、他方、娯楽性やマーケッティグ的側面に関する項目を減らして作成した。

番組に対する評価に関わる質問項目は、以下の18項目である。選択肢として、①「そう思う」から⑤「そう思わない」まで５段階で回答を求めた。

番組に対する質的評価項目(18項目)

1. 見ごたえのある番組だと思う
2. 今まで知らなかった知識や情報が得られた
3. 映像が印象的だと思う
4. 感動できる番組だと思う
5. 編集が適切な番組だと思う
6. 防災や減災に役立つ番組だと思う
7. 上品な番組だと思う
8. リラックスして観ることができた
9. 不適切な言葉づかいがあった
10. 構成が適切な番組だと思う
11. 刺激が強い番組だと思う
12. 独創性のある番組だと思う
13. 話し手が印象的な番組だと思う
14. 共感できる番組だと思う
15. 話題性のある番組だと思う
16. 内容に偏りがある番組だと思う
17. 生活や行動を変えるきっかけになる番組だと思う
18. きいたことのある話や内容の番組だと思う

他方、番組評価に関わる質問項目とは別に、従来、震災後世代の震災記憶継承に関する意識態度調査と共通する質問項目を加えた。それらに関する質問項目は、以下のとおりである。これらの刺激文に対する選択肢として、①「そう思う」から⑤「そう思わない」までの５段階で回答を求めた。

大震災に対する意識・態度(９項目)

1 阪神・淡路大震災の被災地は、おおむね復興をとげている。
2 マスメディアや行政、学校は、阪神・淡路大震災の記憶や経験を伝える取り組みを十分に行っている
3 大震災で亡くなった人の家族や友人を悲しませないために、犠牲者個人の話題は触れない方がよい
4 大震災の被害から力強く立ち直った被災者や被災地のエピソードをもっと伝えるべきだ
5 大震災の復興が進んでいない町や地域について知らせることは、イメージが暗くなるので強調しない方がよい
6 大震災で傷ついたり、亡くなったりした人の悲しい話はできれば聞きたくない
7 復興過程で生じた社会問題などを広く伝え

34 ネットを利用したテレビ番組評価サイトQUAEが使用する項目群を参考に、本調査に適した変更を加えた。小玉美意子「テレビ番組評価サイト『QUAE』のマス・コミュニケーション研究上の位置づけ」『ソシオロジスト』13号、2011年、pp.1―32

ることは必要だ

8　被災者の不正や被災地での犯罪など、支援や復興の妨げになる都合の悪い情報は隠されている

9　震災を知らない世代でも、大震災の記憶や経験を将来に伝える責任がある

さらに、今回の調査対象者の震災記憶継承に対する態度・意識を過去の調査対象者との比較において捉える試みも行なった。AとBの相反する刺激文に対して、どちらかを選択する形の質問形式で、①「Aに賛成する」から⑤「Bに賛成する」までの５段階で回答を求めた。

大震災の記憶継承についての意識・態度についてAB選択質問項目（４項目）

1　大震災について記憶の継承について

A　被災者の感情や思いについての記憶の継承にこそ力を入れるべきだ、

B　データに基づく客観的な事実の継承にこそ力を入れるべきだ。

2　震災遺構について

A　できるかぎり災害の爪痕は消して、新しい町並みや都市景観に作り変えるのがよい。

B　被災を物語る象徴的な被災建築物や遺物は、たとえ辛い記憶を思い起こさせても残すべきだ。

3　将来の防災への有用性について

A　将来の防災に役立つかどうかを見極めて、防災に役立つ情報や知識を優先して伝えるべきだ。

B　将来の防災に役立つかどうかにかかわりなく、歴史的事実や被災者の記憶は記録して伝えるべきだ。

4　被災者や犠牲者のエピソードについて

A　被災者自身や家族を失った人たちの心情に配慮し、被災者や犠牲者の個人的なエピソードを公表するべきではない。

B　たとえ辛い経験や思い出であっても、被災者や犠牲者の個人的なエピソードを記録し伝えることは必要だ。

以上、31項目に回答者の性別や年齢、出身地等の属性を尋ねる項目を加えて評価調査項目とし、これに自由回答形式の質問を加えた。

D-2. 第２調査（教室／質問紙調査）

他方、第２調査（教室／質問紙調査）については、教室での視聴後に記述用紙を配布し、自由回答のみの回答形式を採用した。

E.　調査結果と分析

第１調査は、2021年５月に実施され、492票の有効回答を得ることができた。他方、第２調査は、2021年６月に科目担当講師の金千秋氏によって実施され、43票の有効回答を得ることができた。

E-1. 第１調査（オンライン調査）の結果

まず、第１調査の結果をみてみることにする。

それぞれの質問項目について全体集計を行った結果は、本論の最後に別表１として収録している。本論では、その集計結果をもとに、基礎的な分析を進めることにしたい。

E-1-1. 回答者の属性

回答者の属性については、回答者の８割以上が、19歳と20歳という年齢階層に属しており、阪神・淡路大震災後に生まれた世代であった。性別に関しては、女性（56.3％）が男性（43.7％）よりやや多かった。出生地については、被災地出身（18.2％）が全体の約２割弱を占め、被災地以外の兵庫県内出身者（8.3％）が１割弱、これに対し、県外出身者（73.4％）と７割強を占めた。つ

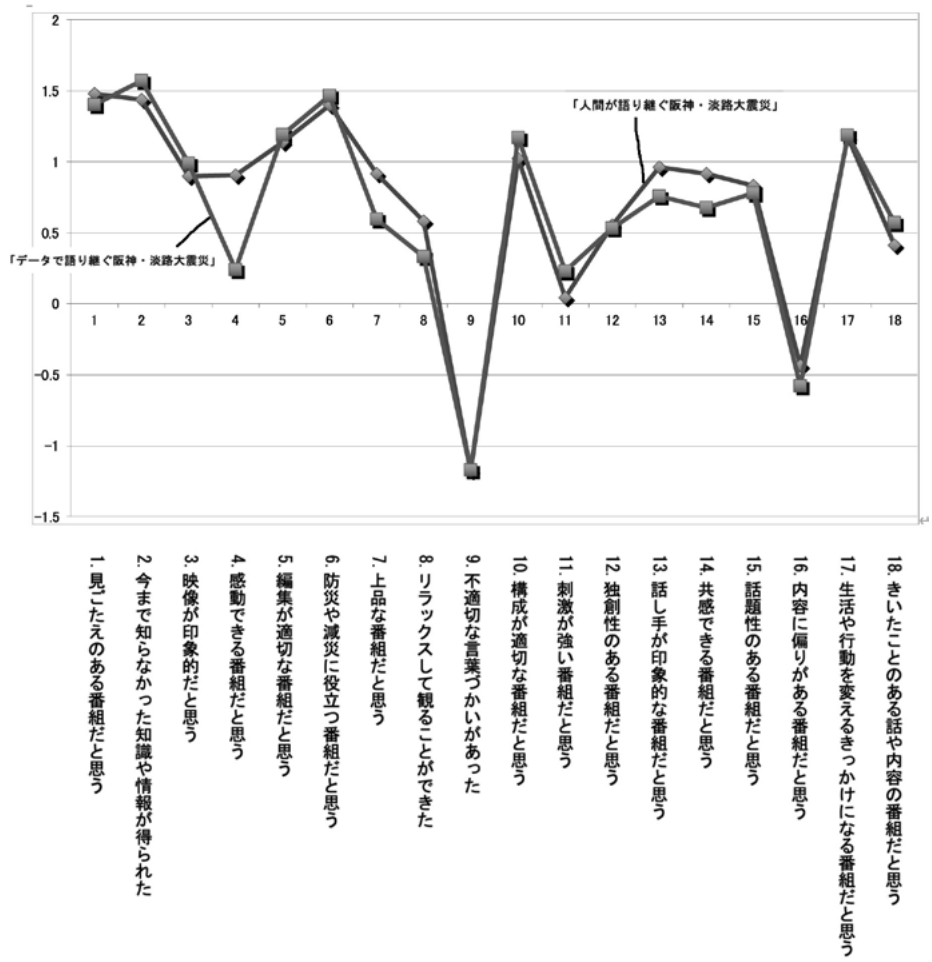


図1

ぎに、現住地については、被災地内に居住する者(41.7％)、被災地外の兵庫県内に居住する者(32.3％)、兵庫県外に居住する者(26.0％)と、現在、被災地に居住する者が４割強と最大多数を示した。しかし、被災地での居住経験については、「住んだことはない」(56.5％)が過半数を超えたが、「４年以上住んだことがある」(20.9％)がこれに続いた。被災地出身者でなくとも、約２割の回答者が被災地に比較的長期に暮らしていることを示した。また、被災者との関係を尋ねた質問に対して、家族・親類・友人知人に被災者がいると回答した者(48.0％)と「いない」と回答した者(52.0％)はほぼ同数であった。つまり、回答者の半数は、身近に阪神・淡路大震災の被災者がいることを示していた。

E-1-2. 番組に対する評価

図１は、評価対象とした２つの番組「人間が語り継ぐ阪神・淡路大震災」「データで語り継ぐ阪神・淡路大震災」について、18の質的評価項目のそれぞれに対して回答者が選んだ５段階の選択肢に関して、「そう思う」から「そう思わない」に＋２から－２までの評価点を与え、それぞれの評価項目ごとにその平均を求め、グラフ化したものである。

２つの番組について、13の評価項目の評価点には、ほとんど差が認められなかったが、しかし、つぎの５つの評価項目については、差が認められた。

評価点について、もっとも大きな差が認められた評価項目は、「4.感動できる番組だった」であった。「人間が語り継ぐ阪神・淡路大震災」に対する評価点が、0.90だったのに対し、「データで語り継ぐ阪神・淡路大震災」の評価点は、0.24に過ぎなかった。つまり、回答者は「人間が語り継ぐ阪神・淡路大震災」が「データで語り継ぐ阪神・淡路大震災」より感動的であると評価したのである。

ほかにも、「人間が語り継ぐ阪神・淡路大震災」が「データで語り継ぐ阪神・淡路大震災」より高い評価点を示した評価項目があった。先述の「4.感動できる番組だった」ほどではないが、「7.上品な番組だと思う」(0.92:0.60)、「14.共感できる番組である」(0.91:0.68)、「8.リラックスして観ることができた」(0.58:0.33)、「13.話し手が印象的な番組である」(0.96:0.76)の４つの評価項目について、「人間が語り継ぐ阪神・淡路大震災」が「データで語り継ぐ阪神・淡路大震災」より高い評価点を示した。

これに対し、「データで語り継ぐ阪神・淡路大震災」が「人間が語り継ぐ阪神・淡路大震災」より高い評価点を示した評価項目は、「2.今まで知らなかった知識や情報が得られた」(1.57:1.43)、「11.刺激が強い番組だと思う」(1.17:1.02)、「18.きいたことのある話や内容の番組だと思う」(0.57:0.41)などであった。ただ、その差は、かなり小さなものであった。

全体をとおしてみれば、番組に対する否定的評価を示す２つの評価項目(「9.不適切な言葉づかいがあった」「15.内容に偏りがある番組だと思う」)については、回答者は全体としてマイナスの評価点を与えており、これは、番組が一定の公正さの水準を満たしていることを示唆しているといえた。

E-1-3. 大震災に対する態度・意識

これら２つの番組を視聴した後に、2019年度、2020年度の調査で質問した同じ質問項目の９つの刺激文に対する回答者の反応を５段階尺度で反応を求めたところ、興味深い回答が得られた。

2019年度、2020年度の調査では、事前に大震災関連の番組などの視聴を促すことなく、調査が行われた。これに対し、今回の2021年度調査では、事前に２つの番組の視聴を求めた後、同じ質問項目について、回答を求めたのである。個々の反応項目についての詳細な結果は別表を参照いただき、ここでは、５段階尺度で質問した評価項目のそれぞれに対して回答者が選んだ５段階の選択肢に関して、「そう思う」から「そう思わない」に＋２から－２までの評価点を与え、それぞれの評価項目ごとにその平均を求めた評価点を示す。

表１は、2019年度、2020年度と今回の2021年度調査で質問した同じ項目に対する結果を比較したものである。

項目１の「１　阪神・淡路大震災の被災地は、おおむね復興をとげている。」についてみると、2019年度から2020年度へと回答者の反応では、「復興を遂げている」という認識が増加していた(0.89→1.48)。これに対して、今回の調査では、評価点が1.15へと減少した。この結果をみると、回答者が番組を視聴した結果、復興への課題がいまだ残っているという認識を持ったということができるかもしれない。

項目２の「２　マスメディアや行政、学校は、阪神・淡路大震災の記憶や経験を伝える取り組みを十分に行っている」については、2020年度より若干低い評価(0.64→ 0.49)となった。

項目３の「３　大震災で亡くなった人の家族や友人を悲しませないために、犠牲者個人の話題は触れない方がよい」については、2021年度の結果では、2019年度、2020年度と比較して、評価点が３分の１に減少した(0.16, 0.15→ 0.05)。つまり、回

表1 大震災についての意識態度の比較(2019年、2020年、2021年)

C 次のような意見があります。あなたの共感の程度にもっとも近い選択肢を1つ選んで下さい。

	2019年度・評価点*	2020年度・評価点	2021年度(今回)評価点
1 阪神・淡路大震災の被災地は、おおむね復興をとげている	0.89	1.48	1.15
2 マスメディアや行政、学校は、阪神・淡路大震災の記憶や経験を伝える取り組みを十分に行っている	−	0.64	0.49
3 大震災で亡くなった人の家族や友人を悲しませないために、犠牲者個人の話題は触れない方がよい	0.16	0.15	0.05
4 大震災の被害から力強く立ち直った被災者や被災地のエピソードをもっと伝えるべきだ	0.55	1.17	1.09
5 大震災の復興が進んでいない町や地域について知らせることは、イメージが暗くなるので強調しない方がよい	-0.31	-0.73	-0.83
6 大震災で傷ついたり、亡くなったりした人の悲しい話はできれば聞きたくない	-0.05	-0.27	-0.33
7 復興過程で生じた社会問題などを広く伝えることは必要だ	0.83	1.62	1.62
8 被災者の不正や被災地での犯罪など、支援や復興の妨げになる都合の悪い情報は隠されている	0.43	0.81	0.61
9 震災を知らない世代でも、大震災の記憶や経験を将来に伝える責任がある	0.78	1.52	1.56

評価点*:5段階尺度(−2 ⟷ +2)の平均

答者は全体として、「犠牲者個人の話題に触れること」に否定的反応を示す傾向が緩やかになったということができる。

項目4の「4 大震災の被害から力強く立ち直った被災者や被災地のエピソードをもっと伝えるべきだ」については、2019年度から2020年度へ評価点は約2倍に上昇した(0.55→ 1.17)が、2020年度から今回の2021年度(1.09)への変化はやや減少傾向を示したものの、大きな変化は認められなかった。

項目5の「5 大震災の復興が進んでいない町や地域について知らせることは、イメージが暗くなるので強調しない方がよい」についても同様で、2020年度から今回の2021年度へと評価点は緩やかに下降したものの(-0.73→ -0.83)、大きな変化は認められなかった。この項目については、震災からの時間が経過するに従って、「復興が進んでいない町や地域について知らせること」について反対の態度をもつ回答者は減少傾向を示しているといえよう。

項目6の「6 大震災で傷ついたり、亡くなったりした人の悲しい話はできれば聞きたくない」についても、2020年度から今回の2021年度へと評価点は緩やかに下降したものの(-0.27→ -0.33)、大きな変化は認められなかった。この項目についても、震災からの時間が経過するに従って、「悲しい話はできれば聞きたくない」という態度をもつをもつ回答者は減少傾向を示しているといえよう。

項目7の「7 復興過程で生じた社会問題などを広く伝えることは必要だ」についても、同様に、2020年度から今回の2021年度へと大きな変化は認められなかった。「復興過程の社会問題を広く伝える」ことに対して、回答者は全体として賛成の態度を示した。

項目8の「8 被災者の不正や被災地での犯罪など、支援や復興の妨げになる都合の悪い情報は隠されている」については、2019年度から2020年度へと「そう思う」と考える回答者は増加した(0.43→ 0.81)。しかし、今回の2021年度調査では、ふたたび若干の減少を示した(0.61)。

項目9の「9 震災を知らない世代でも、大震災の記憶や経験を将来に伝える責任がある」については、2020年度から2021年度へと「そう思う」と考える回答者は、全体として高く(1.52→ 1.56)、その傾向に変化はほとんどなかった。

E-1-4. 大震災に対する態度・意識（AB選択質問項目）

表２は、大震災の記憶継承にかかわる意識や態度について、AとBの相対する意見を刺激文として回答者に示し、どちらを支持するか尋ねた結果を、番組の視聴が行われなかった2020年度と番組を視聴した直後の2021年度で比較したものである。ただし、回答者の集団は、2020年度と2021年度でそれぞれ異なっているため、厳密な意味で番組視聴の前と後での比較ではない。

とりあげた４つの刺激文のそれぞれについて、個別に結果をみてみる。

まず、①大震災の記憶継承に関して、A「被災者の感情や思いについての記憶の継承にこそ力を入れるべきだ」とB「データに基づく客観的な事実の継承にこそ力を入れるべきだ」という２つの相対する意見については、両年度ともにA「被災者の感情や思いについての記憶の継承にこそ力を入れるべきだ」に賛成する回答者が多かったが、2021年度は2020年度に比べて、その傾向は若干強まっていた（0.52→ 0.58）。

つぎに、②災害遺構の保存に関して、A「できるかぎり災害の爪痕は消して、新しい町並みや都市景観に作り変えるのがよい」とB「被災を物語る象徴的な被災建築物や遺物は、たとえ辛い記憶を思い起こさせても残すべきだ」という相反する意見については、両年度ともB「被災を物語る象徴的な被災建築物や遺物は、たとえ辛い記憶を思い起こさせても残すべきだ」という意見に賛成する回答者が多かったが、2021年度は、2020年度に比べて、その傾向は弱くなっていた。つまり、全体としては、Bに賛成する傾向を示してはいるが、2021年度の回答者は、Aの意見に賛成する割合が2020年度より若干強まったということができる。

つぎに、③将来の防災への有用性に関して、A「将来の防災に役立つかどうかを見極めて、防災に役立つ情報や知識を優先して伝えるべきだ」とB「将来の防災に役立つかどうかにかかわりなく、歴史的事実や被災者の記憶は記録して伝えるべきだ」という相対する意見については、両年度とも、A「将来の防災に役立つかどうかを見極めて、防災に役立つ情報や知識を優先して伝えるべきだ」という意見に賛成する回答者がやや多数を示す傾向にあったが、2021年度は、2020年度に比べて、その傾向は、さらに弱くなった。つまり、全体としては、Aに賛成する傾向を示してはいるが、2021年度の回答者は、Bの意見に賛成する割合が2020年度より若干強まったということができる。

最後に、④被災者や犠牲者のエピソードに関して、A「被災者自身や家族を失った人たちの心情に配慮し、被災者や犠牲者の個人的なエピソードを公表するべきではない」とB「たとえ辛い経験や思い出であっても、被災者や犠牲者の個人的なエピソードを記録し伝えることは必要だ」という相対する意見については、両年度とも、B「たとえ辛い経験や思い出であっても、被災者や犠牲者の個人的なエピソードを記録し伝えることは必要だ」に賛成する回答者が多かったことを示しているが、2021年度は、2020年度に比べて、その傾向は若干強まったということだできる。

以上の結果をみると、震災の記憶継承を目的とするこの２つの番組を視聴した直後の回答者は、被災者の感情や思いなどの記憶継承に対する積極性が増し、また、辛い経験であっても被災者や犠牲者のエピソードを記録し伝えることに肯定的な態度をより強く示すようになったといえる。さらに、防災への有用性については、将来の防災に役立つ知識や情報を優先的に残すことに、全体として積極的であるものの、番組視聴後の2021年度調査では、防災に役立つかどうかに関係なく、被災者の記憶を残すことに対して、肯定的な態度をもつ回答者が増加したことがわかる。ただ、災害遺構については、むしろ新しい都市景観や街並みに作り変えた方が良いとする意識が強まった。

表2 震災記憶についての意識・態度比較

D 対立するAとBの意見があります。あなたは、どちらを支持しますか。当てはまる選択肢を1つ選んで下さい。

1 大震災について記憶の継承について

A 被災者の感情や思いについての記憶の継承にこそ力を入れるべきだ。
B データに基づく客観的な事実の継承にこそ力を入れるべきだ。

D1	2020年			2021年		
	実数	%	評価点*	実数	%	評価点*
①Aに賛成	157	21.0%		94	19.1%	
②どちらかといえばAに賛成	293	39.1%		225	45.7%	
③どちらともいえない	118	15.8%		72	14.6%	
④どちらかといえばBに賛成	141	18.8%		74	15.0%	
⑤Bに賛成	40	5.3%		27	5.5%	
全体	749	100.0%	0.52	492	100.0%	0.58

2 災害遺構について

A できるかぎり災害の爪痕は消して、新しい町並みや都市景観に作り変えるのがよい。
B 被災を物語る象徴的な被災建築物や遺物は、たとえ辛い記憶を思い起こさせても残すべきだ。

D2	2020年			2021年		
	実数	%	評価点*	実数	%	評価点*
①Aに賛成	78	10.4%		48	9.8%	
②どちらかといえばAに賛成	138	18.4%		114	23.2%	
③どちらともいえない	169	22.6%		93	18.9%	
④どちらかといえばBに賛成	265	35.4%		180	36.6%	
⑤Bに賛成	99	13.2%		57	11.6%	
全体	749	100.0%	-0.23	492	100.0%	-0.17

3 将来の防災への有用性について

A 将来の防災に役立つかどうかを見極めて、防災に役立つ情報や知識を優先して伝えるべきだ。
B 将来の防災に役立つかどうかにかかわりなく、歴史的事実や被災者の記憶は記録して伝えるべきだ。

D3	2020年			2021年		
	実数	%	評価点*	実数	%	評価点*
①Aに賛成	176	23.5%		79	16.1%	
②どちらかといえばAに賛成	227	30.3%		174	35.4%	
③どちらともいえない	100	13.4%		68	13.8%	
④どちらかといえばBに賛成	170	22.7%		118	24.0%	
⑤Bに賛成	76	10.1%		53	10.8%	
全体	749	100.0%	0.34	492	100.0%	0.22

4 被災者や犠牲者のエピソードについて

A 被災者自身や家族を失った人たちの心情に配慮し、被災者や犠牲者の個人的なエピソードを公表するべきではない。
B たとえ辛い経験や思い出であっても、被災者や犠牲者の個人的なエピソードを記録し伝えることは必要だ。

D4	2020年			2021年		
	実数	%	評価点*	実数	%	評価点*
①Aに賛成	65	8.7%		30	6.1%	
②どちらかといえばAに賛成	126	16.8%		98	19.9%	
③どちらともいえない	193	25.8%		116	23.6%	
④どちらかといえばBに賛成	278	37.1%		187	38.0%	
⑤Bに賛成	87	11.6%		61	12.4%	
全体	749	100.0%	-0.26	492	100.0%	-0.31

評価点*：5段階尺度（−2 ←→ +2）の平均

これらの変化を単純に番組視聴の効果や影響ということについては、先述したように両調査の対象集団が異なるため慎重になる必要があるが、番組視聴が震災後世代の震災記憶の継承について、とりわけ被災者や犠牲者の体験や記憶の継承に正の影響や効果をもたらすのではないかという仮説を成立させうる１つの契機となるのではないかと思われる。

E-1-5. 自由記述回答

最後に、自由記述欄に書き込まれたコメントや意見については、まず、「人間が語り継ぐ阪神・淡路大震災」の番組を視聴して寄せられた自由記述回答は、全体で178回答あった。これらの自由記述回答をいくつかの項目をたてて、整理した。その整理項目としては、①震災への関心、知識、考える機会の獲得についての記述、②被災者の実体験、意見、感情などへの接触についての記述、③話し手の語り、感情や思いなどへの反応、④個々の事実やエピソードなどについての記述、⑤生き方、価値観、思考、行動の変化などの記述、⑥災害への備え、防災、教育などの記述、⑦震災の記憶継承の意義などの記述、⑧災害経験の継承の困難さの記述、⑨番組の形式、表現手法などに対する評価や意見、の９つを立てた。一つの記述が複数の整理項目に対応する場合も、当然あったが、煩雑さを避けるため、もっとも主要な要素がどれかを判断して、割り振った。それらの回答を、別表2-1にまとめて報告している。

他方、「データで語り継ぐ阪神・淡路大震災」の番組を視聴して寄せられた自由記述回答は、全体で167項目あった。そして、それらを整理する項目として、①震災への関心、知識、考える機会の獲得についての記述、②個々の事実、問題、エピソードなどへの関心などの記述、③驚き、恐怖、感情的反応など、④生き方、価値観、思考、行動の変化などの記述、⑤災害への備え、防災、教育などの記述、⑥震災の記憶継承の意義などの記述、⑦番組の形式、表現手法などに対する評価や意見、の７つを立てた。当然、一つの記述が複数の整理項目に対応する場合も、煩雑さを避けるため、もっとも主要な要素がどれかを判断して、割り振った。それらの回答を、別表2-2にまとめて報告している。

この別表２に示されているように、自由回答欄には、この２つの性格の異なった震災記憶継承実験番組に対して、実に多様な意見や感想が寄せられた。今回の調査での自由回答欄は、質的調査法におけるドキュメント分析などに見られるような手続きを経ることによってなんらかの集約的な知見を見出すというより、今後の番組制作に資するさまざまな課題の発掘や改善へ示唆を得ることであった。そのため、ここでは、精緻なドキュメント分析は行わない。ただ、２つの番組に対するコメントや反応について、注目すべきいくつかの特徴が認められたことを指摘しておきたい。

まず、２つの番組の両方に共通するコメントや意見としては、大震災について新たな知識を得たり、関心をもつ機会になったという回答が多数みられた。そして、防災や災害時の救援や助け合いなどの重要性について認識をしたという回答も多数認められた。

つぎに、「人間が語り継ぐ阪神・淡路大震災」については、大震災についての知識を得る機会になったという回答と併せて、被災者の語りを聞くことによって、震災を実感することができたというコメントや被災者の感情や思いに対して共感を持ったというコメントが多数寄せられた。また、番組を視聴したことによって、人生観や価値観、生き方が変わったというコメントも少なからず寄せられた。その一方、被災者の語りに特化した番組構成のため、大震災の全体像がわかりにくい、被災者の個人的経験に偏っているなどのコメントも寄せられた。

つぎに、「データで語り継ぐ阪神・淡路大震災」については、大震災についての知識を得る機会になったという回答に加えて、個々の回答者の興味や関心に応じて、番組内で取り上げられたさまざまな事実の中から、とくに関心を引いた事柄について、コメントや意見が寄せられた。大震災についての具体的な知識を得たという回答は、「人間が語り継ぐ阪神・淡路大震災」の場合と比較してより多数を示した。これとは別に、少数ではあったが、番組をみた後で、恐怖や不安の感情を持ったという回答が認められた。また、次々とデータを提示していく番組構成については、客観的で理解しやすかったという意見が多かったが、その一方、「ロボットみたいで説得力がない」「心に響かない」などのコメントも少数認められた。

E-2. 第２調査（教室／質問し調査）の結果

先述したように、第２調査は、教室で回答者に２つの番組を視聴してもらい、回答用紙を配布して、それに自由に意見やコメントを記入してもらう形式で行われた。その際、２つの番組（「人間が語り継ぐ阪神・淡路大震災」、「データで語り継ぐ阪神・淡路大震災」）のいずれかを選んで、それに対する感想を小レポートとして記述することを求めた。そのため、回答者は、第１調査とは異なり、まとまった論述として回答を記述している。そこで、本報告では、それらの回答を第１調査のように整理分類することはせず、これら43票の回答をそのまま、収録することとした。

ここでは、第２調査の自由記述回答をそれぞれの番組ごとに、別表３としてまとめた。

この第２調査についても、ドキュメント分析などによって集約的な知見を見出すというより、今後の番組制作に資するさまざまな課題の発掘や改善へ示唆を得ることであった。そのため、ここでは、精緻なドキュメント分析は行わないが、１つ指摘しておきたい点は、回答者のおよそ４分の３が、レポートの対象として「人間が語り継ぐ阪神・淡路大震災」を選んだことである。この事実は、この番組が、「データで語り継ぐ阪神・淡路大震災」に比べて、回答者により強い印象を与えたことを示唆しているように思われる。

F.考察と提言

2021年度の調査の結果を概観して、分かったことやそこから考察されることをまとめておきたい。

まず、この２つの「人間が語り継ぐ阪神・淡路大震災」と「データで語り継ぐ阪神・淡路大震災」の視聴が震災後世代にどのような影響をもたらしたかを考えたい。

この２つの番組の視聴が共通してもたらした影響として、つぎの２点を指摘することができるだろう。まず、①震災を知らない若い世代に阪神・淡路大震災に関する知識や情報にふれる機会を提供することをつうじて、彼ら／彼女らが、大震災への知識や理解を深めたことである。つぎに、②災害への備え、防災活動、災害時の被災者支援などの重要性への認識を強化したこともあげることができる。

これに加えて、大震災についての意識や認識への変化も指摘できる。中でも、これら番組の視聴によって震災後世代の復興に対する認識が、「被災地はすでに復興した」という認識から「復興は未だ十分ではない」という認識に緩やかに変化した点は注目できよう。この変化は、大震災を過去の過ぎ去った歴史上の出来事から現在もなお進行中の出来事として捉えようとする意識の変化だといえるだろう。また、これと併せて、これらの番組の視聴をとおして、被災者の辛い経験や犠牲者個人のエピソードに触れることを躊躇する感情が少しく緩和されたことも指摘しておきたい。これらの変化は大震災がもたらしたさまざまな社会的課題の解決をこれからも継続していくための重要な

社会的契機となりうるものである。

つぎに、この２つの番組のそれぞれについて、それを視聴した震災後世代がどのような反応や評価を示したかの分析をとおして、番組がもたらした影響や効果について考察しておきたい。

まず、「人間が語り継ぐ阪神・淡路大震災」については、被災者の震災時の経験や心情への理解と共感が醸成された点を指摘することができる。それは、番組評価について「感動できる番組」「上品な番組」「リラックスして観ることができる番組」などの項目について、より高い評価点をこの番組が得たことからもわかるだろう。また、たんに被災者への理解が醸成されただけでなく、被災者の語りへの傾聴を通して、一部のオーディエンスに広く人生観や生き方への姿勢、価値観の変化をもたらしたことも付け加えておきたい。

しかし、他方、自由記述回答の中に、個人的なエピソードが中心で、震災の全体像が把握しにくいなどの指摘をする回答者もいたことが示唆するように、大震災で起こったさまざまな出来事を俯瞰的に捉えるには、不十分であることも同時に指摘されるところとなった。

つぎに、「データで語り継ぐ阪神・淡路大震災」については、まず、オーディエンスに対して、大震災の全体像を把握するためのより多くの知識や情報をもたらしたことを指摘することができる。この知識や情報の提供という側面についてみれば、この「データで語り継ぐ阪神・淡路大震災」は、「人間が語り継ぐ阪神・淡路大震災」より強い影響を与えたといえるだろう。

しかし、この番組は、一部に震災に対する恐怖や不安感情をもたらしたことに注目する必要がある。自由記述回答に「恐怖」「悲惨」などの不安感情を示唆する表現が散見された。番組評価でも「刺激が強い番組」の項目の評価点は、「人間が語り継ぐ阪神・淡路大震災」より高く、逆に「リラックスして観ることができる番組」の項目の評価点がそれより低かったことがそれを裏書きしている。また、自由記述回答に「淡々としている」「心に響かない」「数値ばかりでよくわからない」など、番組が共感性の醸成という点に欠けている指摘もあった。

最後に、上記の諸点を総合的に考えると、たんに客観的なデータや知識を論理的に伝えるだけでは、オーディエンスの共感や理解を得るという点でかならずしも有効ではなく、震災への理解や被災者への共感は、たとえそれが部分的、主観的であっても、「人間の語り」をとおして伝えることによって、はじめて醸成されるといえるかもしれない。

本論の冒頭でも紹介した、社会学者のモーリス・アルヴァックスが「実際に出来事についての何の思い出ももたず、ただ歴史的観念だけにとどまっていたとしたら、…その際介入してくるのは抽象的知識であって、記憶ではない」と指摘するように、震災の記憶継承には、たんなるデータや事実の記録だけではなく、それを語る人間の関与が欠かせない。災害記憶の継承には、「データが語る」全体像への理解や客観的知識の獲得だけでなく、「人間が語る」エピソードがもたらす共感や行動変容などの両方が必要だということをあらためて再認識するのである。

そのことを考えれば、この２つの要素を融合させた震災記憶の継承のためのメディアコンテンツの制作が、本研究班の次の課題ということになるに違いない。

参考文献

小玉美意子「テレビ番組評価サイト『QUAE』のマス・コミュニケーション研究上の位置づけ」『ソシオロジスト』13号、2011年、pp.1―32

モーリス・アルヴァックス『集合的記憶』小関藤一郎訳、行路社、1989年

震災発『阪神・淡路大震災の記憶』（https://www.shinsaihatsu.com/data/gaiyo.html）

神戸新聞NEXT「データでみる阪神・淡路大震災」(https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/sinsai/graph/)
神戸市 「震災資料室」(Web Page)、神戸市消防局 「阪神・淡路大震災」(https://www.city.kobe.lg.jp/a57337/bosai/hanshinawaji/data/index.html)
内閣府「防災情報のページ」(https://www.bousai.go.jp)
柏原士郎、森田孝夫、上野淳『阪神・淡路大震災における避難所の研究』大阪大学出版局、1998年
日本火災学会『1995年 兵庫県南部地震における火災に関する調査報告書』1996年
兵庫県『阪神・淡路大震災の死者にかかる調査について』2005年12月22日記者発表資料
舞田敏彦「災害での死者数は、なぜ女性の方が多いのか」『ニューズウィーク日本版』2019年10月23日
人と防災未来センター『資料室ニュース』30号、2006年11月15日
都市防災研究所『阪神・淡路大地震における在日外国人被災状況調査』1995年
外国人地震情報センター『阪神大震災と外国人「多文化共生社会」の現状と可能性』1996年
日本経済新聞「復興の街が問う未来 阪神大震災から25年」2020年1月17日(https://vdata.nikkei.com/newsgraphics/great-hanshin-earthquake-25/)

※QRコードは(株)デンソーウェーブの登録商標です。

別表１　番組視聴反応評価調査　全体集計結果

Ａ「人間が語り継ぐ阪神・淡路大震災」を視聴していただき、あなたの意見や感想に最も近い選択肢を１つ選んでください。

1.　見ごたえのある番組だと思う

	実数	%	評価点*
①そう思う	287	58.3%	
②すこしそう思う	173	35.2%	
③どちらともいえない	15	3.0%	
④あまり思わない	14	2.8%	
⑤そう思わない	3	0.6%	
合計	492	100.0%	1.48

2.　今まで知らなかった知識や情報が得られた

	実数	%	評価点*
①そう思う	267	54.3%	
②すこしそう思う	184	37.4%	
③どちらともいえない	31	6.3%	
④あまり思わない	8	1.6%	
⑤そう思わない	2	0.4%	
合計	492	100.0%	1.43

3.　映像が印象的だと思う

	実数	%	評価点*
①そう思う	175	35.6%	
②すこしそう思う	172	35.0%	
③どちらともいえない	78	15.9%	
④あまり思わない	53	10.8%	
⑤そう思わない	14	2.8%	
合計	492	100.0%	0.90

4.　感動できる番組だと思う

	実数	%	評価点*
①そう思う	139	28.3%	
②すこしそう思う	210	42.7%	
③どちらともいえない	105	21.3%	
④あまり思わない	33	6.7%	
⑤そう思わない	5	1.0%	
合計	492	100.0%	0.90

5. 編集が適切な番組だと思う

	実数	%	評価点*
①そう思う	207	42.1%	
②すこしそう思う	181	36.8%	
③どちらともいえない	77	15.7%	
④あまり思わない	19	3.9%	
⑤そう思わない	8	1.6%	
合計	492	100.0%	1.14

6. 防災や減災に役立つ番組だと思う

	実数	%	評価点*
①そう思う	274	55.7%	
②すこしそう思う	162	32.9%	
③どちらともいえない	37	7.5%	
④あまり思わない	16	3.3%	
⑤そう思わない	3	0.6%	
合計	492	100.0%	1.40

7. 上品な番組だと思う

	実数	%	評価点*
①そう思う	154	31.3%	
②すこしそう思う	169	34.3%	
③どちらともいえない	145	29.5%	
④あまり思わない	22	4.5%	
⑤そう思わない	2	0.4%	
合計	492	100.0%	0.92

8. リラックスして観ることができた

	実数	%	評価点*
①そう思う	121	24.6%	
②すこしそう思う	141	28.7%	
③どちらともいえない	145	29.5%	
④あまり思わない	73	14.8%	
⑤そう思わない	12	2.4%	
合計	492	100.0%	0.58

9. 不適切な言葉づかいがあった

	実数	%	評価点*
①そう思う	14	2.8%	
②すこしそう思う	22	4.5%	
③どちらともいえない	64	13.0%	
④あまり思わない	156	31.7%	
⑤そう思わない	236	48.0%	
合計	492	100.0%	-1.17

10. 構成が適切な番組だと思う

	実数	%	評価点*
①そう思う	151	30.7%	
②すこしそう思う	230	46.7%	
③どちらともいえない	89	18.1%	
④あまり思わない	15	3.0%	
⑤そう思わない	7	1.4%	
合計	492	100.0%	1.02

11. 刺激が強い番組だと思う

	実数	%	評価点*
①そう思う	47	9.6%	
②すこしそう思う	141	28.7%	
③どちらともいえない	135	27.4%	
④あまり思わない	123	25.0%	
⑤そう思わない	46	9.3%	
合計	492	100.0%	0.04

12. 独創性のある番組だと思う

	実数	%	評価点*
①そう思う	86	17.5%	
②すこしそう思う	191	38.8%	
③どちらともいえない	139	28.3%	
④あまり思わない	61	12.4%	
⑤そう思わない	15	3.0%	
合計	492	100.0%	0.55

13. 話し手が印象的な番組だと思う

	実数	%	評価点*
①そう思う	162	32.9%	
②すこしそう思う	196	39.8%	
③どちらともいえない	92	18.7%	
④あまり思わない	37	7.5%	
⑤そう思わない	5	1.0%	
合計	492	100.0%	0.96

14. 共感できる番組だと思う

	実数	%	評価点*
①そう思う	138	28.0%	
②すこしそう思う	220	44.7%	
③どちらともいえない	95	19.3%	
④あまり思わない	32	6.5%	
⑤そう思わない	7	1.4%	
合計	492	100.0%	0.91

15. 話題性のある番組だと思う

	実数	%	評価点*
①そう思う	145	29.5%	
②すこしそう思う	188	38.2%	
③どちらともいえない	99	20.1%	
④あまり思わない	50	10.2%	
⑤そう思わない	10	2.0%	
合計	492	100.0%	0.83

16. 内容に偏りがある番組だと思う

	実数	%	評価点*
①そう思う	14	2.8%	
②すこしそう思う	73	14.8%	
③どちらともいえない	168	34.1%	
④あまり思わない	160	32.5%	
⑤そう思わない	77	15.7%	
合計	492	100.0%	-0.43

17. 生活や行動を変えるきっかけになる番組だと思う

	実数	%	評価点*
①そう思う	199	40.4%	
②すこしそう思う	208	42.3%	
③どちらともいえない	61	12.4%	
④あまり思わない	18	3.7%	
⑤そう思わない	6	1.2%	
合計	492	100.0%	1.17

18. きいたことのある話や内容の番組だと思う

	実数	%	評価点*
①そう思う	64	13.0%	
②すこしそう思う	215	43.7%	
③どちらともいえない	100	20.3%	
④あまり思わない	85	17.3%	
⑤そう思わない	28	5.7%	
合計	492	100.0%	0.41

B「データで語り継ぐ阪神・淡路大震災」を視聴していただき、あなたの意見や感想に最も近い選択肢を１つ選んでください。

1. 見ごたえのある番組だと思う

	実数	%	評価点*
①そう思う	252	51.2%	
②すこしそう思う	197	40.0%	
③どちらともいえない	32	6.5%	
④あまり思わない	11	2.2%	
⑤そう思わない	0	0.0%	
合計	492	100.0%	1.40

2. 今まで知らなかった知識や情報が得られた

	実数	%	評価点*
①そう思う	310	63.0%	
②すこしそう思う	156	31.7%	
③どちらともいえない	23	4.7%	
④あまり思わない	2	0.4%	
⑤そう思わない	1	0.2%	
合計	492	100.0%	1.57

3. 映像が印象的だと思う

	実数	%	評価点*
①そう思う	175	35.6%	
②すこしそう思う	183	37.2%	
③どちらともいえない	93	18.9%	
④あまり思わない	35	7.1%	
⑤そう思わない	6	1.2%	
合計	492	100.0%	0.99

4. 感動できる番組だと思う

	実数	%	評価点*
①そう思う	86	17.5%	
②すこしそう思う	126	25.6%	
③どちらともいえない	141	28.7%	
④あまり思わない	98	19.9%	
⑤そう思わない	41	8.3%	
合計	492	100.0%	0.24

5. 編集が適切な番組だと思う

	実数	%	評価点*
①そう思う	198	40.2%	
②すこしそう思う	205	41.7%	
③どちらともいえない	77	15.7%	
④あまり思わない	9	1.8%	
⑤そう思わない	3	0.6%	
合計	492	100.0%	1.19

6. 防災や減災に役立つ番組だと思う

	実数	%	評価点*
①そう思う	283	57.5%	
②すこしそう思う	165	33.5%	
③どちらともいえない	34	6.9%	
④あまり思わない	10	2.0%	
⑤そう思わない	0	0.0%	
合計	492	100.0%	1.47

7. 上品な番組だと思う

	実数	%	評価点*
①そう思う	101	20.5%	
②すこしそう思う	161	32.7%	
③どちらともいえない	169	34.3%	
④あまり思わない	52	10.6%	
⑤そう思わない	9	1.8%	
合計	492	100.0%	0.60

8. リラックスして観ることができた

	実数	%	評価点*
①そう思う	83	16.9%	
②すこしそう思う	136	27.6%	
③どちらともいえない	157	31.9%	
④あまり思わない	92	18.7%	
⑤そう思わない	24	4.9%	
合計	492	100.0%	0.33

9. 不適切な言葉づかいがあった

	実数	%	評価点*
①そう思う	9	1.8%	
②すこしそう思う	25	5.1%	
③どちらともいえない	76	15.4%	
④あまり思わない	143	29.1%	
⑤そう思わない	239	48.6%	
合計	492	100.0%	-1.17

10. 構成が適切な番組だと思う

	実数	%	評価点*
①そう思う	175	35.6%	
②すこしそう思う	239	48.6%	
③どちらともいえない	64	13.0%	
④あまり思わない	14	2.8%	
⑤そう思わない	0	0.0%	
合計	492	100.0%	1.17

11. 刺激が強い番組だと思う

	実数	%	評価点*
①そう思う	62	12.6%	
②すこしそう思う	166	33.7%	
③どちらともいえない	124	25.2%	
④あまり思わない	102	20.7%	
⑤そう思わない	38	7.7%	
合計	492	100.0%	0.23

12. 独創性のある番組だと思う

	実数	%	評価点*
①そう思う	90	18.3%	
②すこしそう思う	184	37.4%	
③どちらともいえない	134	27.2%	
④あまり思わない	65	13.2%	
⑤そう思わない	19	3.9%	
合計	492	100.0%	0.53

13. 話し手が印象的な番組だと思う

	実数	%	評価点*
①そう思う	136	27.6%	
②すこしそう思う	181	36.8%	
③どちらともいえない	105	21.3%	
④あまり思わない	59	12.0%	
⑤そう思わない	11	2.2%	
合計	492	100.0%	0.76

14. 共感できる番組だと思う

	実数	%	評価点*
①そう思う	115	23.4%	
②すこしそう思う	179	36.4%	
③どちらともいえない	137	27.8%	
④あまり思わない	46	9.3%	
⑤そう思わない	15	3.0%	
合計	492	100.0%	0.68

15. 話題性のある番組だと思う

	実数	%	評価点*
①そう思う	131	26.6%	
②すこしそう思う	186	37.8%	
③どちらともいえない	118	24.0%	
④あまり思わない	48	9.8%	
⑤そう思わない	9	1.8%	
合計	492	100.0%	0.78

16. 内容に偏りがある番組だと思う

	実数	%	評価点*
①そう思う	11	2.2%	
②すこしそう思う	61	12.4%	
③どちらともいえない	146	29.7%	
④あまり思わない	181	36.8%	
⑤そう思わない	93	18.9%	
合計	492	100.0%	-0.58

17. 生活や行動を変えるきっかけになる番組だと思う

	実数	%	評価点*
①そう思う	198	40.2%	
②すこしそう思う	210	42.7%	
③どちらともいえない	64	13.0%	
④あまり思わない	18	3.7%	
⑤そう思わない	2	0.4%	
合計	492	100.0%	1.19

18. きいたことのある話や内容の番組だと思う

	実数	%	評価点*
①そう思う	63	12.8%	
②すこしそう思う	257	52.2%	
③どちらともいえない	84	17.1%	
④あまり思わない	74	15.0%	
⑤そう思わない	14	2.8%	
合計	492	100.0%	0.57

C 次のような意見があります。あなたの共感の程度にもっとも近い選択肢を１つ選んで下さい。

1　阪神・淡路大震災の被災地は、おおむね復興をとげている。

	実数	%	評価点*
①そう思う	172	35.0%	
②すこしそう思う	245	49.8%	
③どちらともいえない	55	11.2%	
④あまり思わない	19	3.9%	
⑤そう思わない	1	0.2%	
合計	492	100.0%	1.15

2　マスメディアや行政、学校は、阪神・淡路大震災の記憶や経験を伝える取り組みを十分に行っている

	実数	%	評価点*
①そう思う	81	16.5%	
②すこしそう思う	203	41.3%	
③どちらともいえない	92	18.7%	
④あまり思わない	106	21.5%	
⑤そう思わない	10	2.0%	
合計	492	100.0%	0.49

3　大震災で亡くなった人の家族や友人を悲しませないために、犠牲者個人の話題は触れない方がよい

	実数	%	評価点*
①そう思う	43	8.7%	
②すこしそう思う	113	23.0%	
③どちらともいえない	196	39.8%	
④あまり思わない	104	21.1%	
⑤そう思わない	36	7.3%	
合計	492	100.0%	0.05

4　大震災の被害から力強く立ち直った被災者や被災地のエピソードをもっと伝えるべきだ

	実数	%	評価点*
①そう思う	186	37.8%	
②すこしそう思う	194	39.4%	
③どちらともいえない	87	17.7%	
④あまり思わない	21	4.3%	
⑤そう思わない	4	0.8%	
合計	492	100.0%	1.09

5　大震災の復興が進んでいない町や地域について知らせることは、イメージが暗くなるので強調しない方がよい

	実数	%	評価点*
①そう思う	12	2.4%	
②すこしそう思う	44	8.9%	
③どちらともいえない	100	20.3%	
④あまり思わない	197	40.0%	
⑤そう思わない	139	28.3%	
合計	492	100.0%	-0.83

6.　大震災で傷ついたり、亡くなったりした人の悲しい話はできれば聞きたくない

	実数	%	評価点*
①そう思う	29	5.9%	
②すこしそう思う	84	17.1%	
③どちらともいえない	150	30.5%	
④あまり思わない	155	31.5%	
⑤そう思わない	74	15.0%	
合計	492	100.0%	-0.33

7　復興過程で生じた社会問題などを広く伝えることは必要だ

	実数	%	評価点*
①そう思う	334	67.9%	
②すこしそう思う	137	27.8%	
③どちらともいえない	16	3.3%	
④あまり思わない	3	0.6%	
⑤そう思わない	2	0.4%	
合計	492	100.0%	1.62

8　被災者の不正や被災地での犯罪など、支援や復興の妨げになる都合の悪い情報は隠されている

	実数	%	評価点*
①そう思う	71	14.4%	
②すこしそう思う	221	44.9%	
③どちらともいえない	145	29.5%	
④あまり思わない	48	9.8%	
⑤そう思わない	7	1.4%	
合計	492	100.0%	0.61

9　震災を知らない世代でも、大震災の記憶や経験を将来に伝える責任がある

	実数	%	評価点*
①そう思う	329	66.9%	
②すこしそう思う	120	24.4%	
③どちらともいえない	35	7.1%	
④あまり思わない	7	1.4%	
⑤そう思わない	1	0.2%	
合計	492	100.0%	1.56

D 対立するAとBの意見があります。あなたは、どちらを支持しますか。当てはまる選択肢を1つ選んで下さい。

1　大震災について記憶の継承について

A　被災者の感情や思いについての記憶の継承にこそ力を入れるべきだ。
B　データに基づく客観的な事実の継承にこそ力を入れるべきだ。

	実数	%	評価点*
①Aに賛成	94	19.1%	
②どちらかといえばAに賛成	225	45.7%	
③どちらともいえない	72	14.6%	
④どちらかといえばBに賛成	74	15.0%	
⑤Bに賛成	27	5.5%	
合計	492	100.0%	0.58

2　災害遺構について

A　できるかぎり災害の爪痕は消して、新しい町並みや都市景観に作り変えるのがよい。
B　被災を物語る象徴的な被災建築物や遺物は、たとえ辛い記憶を思い起こさせても残すべきだ。

	実数	%	評価点*
①Aに賛成	48	9.8%	
②どちらかといえばAに賛成	114	23.2%	
③どちらともいえない	93	18.9%	
④どちらかといえばBに賛成	180	36.6%	
⑤Bに賛成	57	11.6%	
合計	492	100.0%	-0.17

3　将来の防災への有用性について

A　将来の防災に役立つかどうかを見極めて、防災に役立つ情報や知識を優先して伝えるべきだ。
B　将来の防災に役立つかどうかにかかわりなく、歴史的事実や被災者の記憶は記録して伝えるべきだ。

	実数	%	評価点*
①Aに賛成	79	16.1%	
②どちらかといえばAに賛成	174	35.4%	
③どちらともいえない	68	13.8%	
④どちらかといえばBに賛成	118	24.0%	
⑤Bに賛成	53	10.8%	
合計	492	100.0%	0.22

4　被災者や犠牲者のエピソードについて

A　被災者自身や家族を失った人たちの心情に配慮し、被災者や犠牲者の個人的なエピソードを公表するべきではない。
B　たとえ辛い経験や思い出であっても、被災者や犠牲者の個人的なエピソードを記録し伝えることは必要だ。

	実数	%	評価点*
①Aに賛成	30	6.1%	
②どちらかといえばAに賛成	98	19.9%	
③どちらともいえない	116	23.6%	
④どちらかといえばBに賛成	187	38.0%	
⑤Bに賛成	61	12.4%	
合計	492	100.0%	-0.31

評価点*：5段階尺度（−2 ←→ +2）の平均

最後に、あなたご自身についてお答えください。当てはまる選択肢を1つ選んで下さい。

1　年齢

	実数	%
①18歳以下	2	0.4%
②19歳	236	48.0%
③20歳	176	35.8%
④21歳	50	10.2%
⑤22歳以上	28	5.7%
合計	492	100.0%

2　性別

	実数	%
①女	277	56.3%
②男	215	43.7%
③その他	0	0.0%
合計	492	100.0%

3　出生地（生まれたところ）

	実数	%
①神戸市	40	8.1%
②芦屋市	5	1.0%
③西宮市	16	3.3%
④宝塚市	9	1.8%
⑤伊丹市	2	0.4%
⑥尼崎市	7	1.4%
⑦明石市	9	1.8%
⑧（現在の）淡路市*	2	0.4%
⑨（1～8）以外の兵庫県内の地域	41	8.3%
0（1～9）以外の地域	361	73.4%
合計	492	100.0%

*旧：淡路町、北淡町、一宮町、東浦町、津名町

4　現在の居住地(今、住んでいるところ)

	実数	%
①神戸市	51	10.4%
②芦屋市	3	0.6%
③西宮市	77	15.7%
④宝塚市	47	9.6%
⑤伊丹市	4	0.8%
⑥尼崎市	10	2.0%
⑦明石市	11	2.2%
⑧(現在の)淡路市*	2	0.4%
⑨(1～8)以外の兵庫県内の地域	159	32.3%
0(1～9)以外の地域	128	26.0%
合計	492	100.0%

*旧：淡路町、北淡町、一宮町、東浦町、津名町

5　あなたは阪神・淡路大震災の被災地(前問の1～8)に住んだことがありますか

	実数	%
①住んだことはない	278	56.5%
②1年未満住んだことがある	60	12.2%
③1年以上2年未満住んだことがある	0	0.0%
④2年以上3年未満住んだことがある	37	7.5%
⑤3年以上4年未満住んだことがある	14	2.8%
⑥4年以上住んだことがある	103	20.9%
合計	492	100.0%

6　あなたの周囲に阪神・淡路大震災で被災された方がおられますか

	実数	%
①家族が被災した	157	31.9%
②親類が被災した	59	12.0%
③知人や友人が被災した	20	4.1%
④いない	256	52.0%
合計	492	100.0%

別表2　オンライン調査の自由記述回答のまとめ

別表2-1.「人間が語り継ぐ阪神・淡路大震災」視聴後の自由記述回答

①震災への関心、知識、考える機会の獲得についての記述を含む回答

・阪神淡路大震災を経験してないため、この番組で知ることができて良かったです。
・この分野の知識が乏しかったのでとても参考になりました。
・阪神・淡路大震災の記憶は私にはあまりありません。今回この番組を見たことによってとても新しい知識が増えたうえにもっと知らないといけないものであると改めてかんじました。
・地震について知識が少ないのでしれて良かったです。
・当時の地震が起きたときの状況をリアルに伝え、それだけでなく、その後の森崎さん自身の経験から得られた情報を知ることができ、すごくためになった動画で、今後の私の価値観を変えるだろうと思う。
・まだ生まれてなかったので、今回の動画で詳しく知ることができて良かったです。
・阪神淡路大震災の恐ろしさを改めて知ることができました。
・私は震災を経験したことがありません。なので正直にいうと震災について詳しく知らなかったです。そのため震災についてを知る機会、今回のように動画を見ることなどは私に多くの学びを与えてくれます。なのでこのような動画や番組はとても貴重な機会ですし、災害の記憶を伝えていくことの必要性や重要性をとても感じました。Bの動画と一味違って、人の言葉で直接聞く話はとても心に響くものがあり感動しました。
・震災について考えさせてくれる番組だと思った。私はこの震災の後に生まれた世代であ

るため、話を聞くだけでもこの震災について学ぶことができたと思う。
・新たな視点で阪神大震災のことを見直すことができた。また、自分の持っているものを外に出すことの必要性を意識し、不安を力に変えることが重要である。
・阪神淡路大震災に対する興味を持つことが出来た。
・阪神淡路大震災は地元であるので、番組を見て今までより深く考えることができてよかった。
・実際に被害にあわれた方のお話という点だけでなく、コロナやこれからの災害につなげていくことができるような視点もあってより深く考える機会になったと思います。
・震災に対して改めて考え直すきっかけができました。
・阪神淡路大震災がもたらした悲しみ、犠牲があったのは確かなことであるが、その犠牲から学ぶこと、教訓は決してマイナスなことばかりではないと気付かされた。
・いつも遊んでた場所が燃えていた。震災の恐ろしさを改めて知った。
・震災の経験をしたことがないので多くの情報を感じとれた。
・自分自身が地震に遭った経験が無いので興味深い内容であった。
・阪神淡路大震災では、地震の被害よりも火事の被害が大きかったと耳にしたことがありましたが、その怖さを改めて実感しました。
・知らないことを知れました。
・どれだけの方が亡くなられた、どれだけの建物が壊れたなどは聞いたことあったが、もっと詳しい内容や、それ以外の被害について語られていて、改めて地震災害というものが、建物が壊れたりや地震で直接的に命に関わるということだけではなく、想像を遥かに超える苦難や被害があることを知った。
・阪神淡路大震災を経験していない我々学生にとっては、貴重な番組であった。
・親からしか阪神淡路のことを聞いたことがなかったので良い経験でした。
・何度見ても考えさせられる内容だし、他の関学生にも見てほしいです。
・良い番組だと思います

②被災者の実体験、意見、感情などへの接触についての記述を含む回答
・私は神戸の長田に住んでいるので、阪神淡路大震災については小学生の頃からよく話を聞いていました。私や、私の先輩や後輩、そして同じ歳の友人たちは阪神淡路大震災を経験していないので、経験している方の話はすごく貴重だと思います。だんだんと経験したことのある人たちはいなくなってくるので、今、知ることができる時に耳を傾けるべきだと感じました。
・データとして知ることはあっても、人から阪神淡路大震災の体験を聞く機会はあまりないので、とても勉強になった。
・被災者の方々の実体験を聞ける機会が少なくなってきているのでこのような番組を通して知ることは重要であると思います。
・実際に震災を体験した人の話を聞くことによって、当時の状態が良く理解でき、内容に信ぴょう性が生まれていると感じた。しかし、ひとりの方の話しのみを取り上げられていたのでより多くの人の話を取り上げたほうが、状況に一貫性が生まれてより信頼できる番組になると感じた。動画で拝見した話を受け入れるのはいいが、一価値観として受け止め、自分なりに解釈することが必要だと感じた。
・震災を実際に経験したから人の実体験談はとても新鮮だった。
・経験された方の話を聞けたことによって、震災の恐ろしさを再確認することができました。

・実体験を聞くことはあまりないので、単なる知識としての話ではなく、当時のリアルな気持ちなどが聞けたと思う。
・実際の体験談を聴ける貴重な番組になっていると思う。特に近所の人の声を聞いて安心した話は印象的だった。
・私はインターネットでしか見たこと無かったが実際に経験された人の話は重みがあるなと感じた。
・実際に震災を経験した方がお話しされているので、より現実味を感じ、震災の恐ろしさをしみじみと感じた。震災が起こったときにがれきをどけようとするよりも「家族を守ろう」とする自分の気持ちや、近所の人の声が聞こえてきて安心したという言葉を聞いて、例え震災を想定してシミュレーションをしていたとしても、現実には想定どおりの行動、気持ちにはならないと改めて思った。震災だけではなくコロナ禍により多くの人が大変な思いをしている中で、自分の中にある不安を力に変えていくことが重要だと感じた。
・自分がその立場だったらと考えながら見ることができました。
・実際の被災者の方のことばが聞けて改めて考えさせられた。
・被災者本人の話は初めて聞いたのでとても印象的だった。
・実際に阪神・淡路大震災を経験された方が見た光景や状況をありのままに聞くことで、当時の大変な状況を想像することができました。
・戦争を経験した人々がいなくなっていってしまうように、阪神淡路大震災を経験した人々もいつかいなくなってしまう。そのため、この動画のような実体験を語るような動画は需要があると感じた。
・阪神淡路大震災から約26年がたった今、多くの若者は教科書に載っている写真程度でしか阪神淡路大震災を知らないのではないかと思う。阪神淡路大震災を体験した人の声を聞く機会は、祖父母などからよく聞いていましたが、一人一人考え方が違い面白いと思いました。私はまだ大きな災害を体験したことはありませんが、体験した方々のお話を参考にもし自分が体験した場合は助け合って乗り越えたいと思います。
・震災とその後の価値観の形成の関係について初めてお話を聞いたのでとてもためになりました。
・実際に阪神淡路大震災を経験した方のお話を聴くことで、当時の状況がどのようなものだったのかが伝わってきました。
・被災した本人の言葉には重みがありました。
・震災の危険を語り継ぐことは、歴史を語り継ぐくらい重要なことなので、後世にも人々の心に残っていってほしいと感じました。
・実際に体験された方からのお話しであったため、非常に貴重な時間であった。また、リアルなことであったため、地震の恐ろしさを再確認出来た。
・実際の経験者がずっと語っている番組はあまりないと思った。実際の映像などがあれば更に伝わりやすいのかもしれないとも感じたが、語りの中で映像が目に浮かぶような、そんな迫力を感じた。
・大学生になってから関西に来たので、体験している人の話は貴重で聞き入ることができました。
・実体験を聞いて災害への意識が高まった。
・実際に災害に遭われた方の意見を聞くことができる貴重な番組だと思った。当時は地震に対する認識が薄かったという点において、今の新型コロナウイルスに共通するところがあるという意見は確かにそうだと思った。
・経験した人からの率直な感想、話は説得力があると感じた。

・被災者の話を聞けてためになりました
・貴重な話を聞けて良かった。
・貴重なお話が聞けて勉強になりました。
・貴重なインタビューを聞けて良かった
・非常に勉強になった。

③話し手の語り、感情や思いなどへの反応を含む回答

・実際に被害に遭われたときの様子やその時の感情がリアルに伝わってきたのが特に良いと思った。
・話し手の熱意や感情が伝わってきた。しかし、その人の主観や経験が中心であったため、震災を経験した人を複数人集めて、色々な角度から見ることが可能であると思う。
・編集、再構成があまりされておらず、被災者の方のありのままの声を聞けたような印象を受けました。テレビ番組のように一気に感情が揺さぶられる感覚はありませんでしたが、YouTubeでも被災者の方から直接お話を聞くような体験ができると思います。見る人によって違う印象を受け、考えるきっかけとなる、良い記録だと感じました。
・私は関西出身ではないので、阪神・淡路大震災をあまり身近に感じることがなかったので、実際に体験した人の感情を聞くことができたのは貴重でした。
・前回の授業の際も視聴したが、やはり人間が話す映像は感情やその情景がリアルに浮かんでくるのでとても印象に残る映像だと思う。
・話し手の熱量が聞き手にも伝わり、感情がこもってることが伝わった。
・辛い経験をすれば25年前のことでも覚えているということを言っていたから伝えることは大事だと思った。
・人から語り継がれる。語り手の話し方が印象的であった。継承されるべき内容だと考える。また、そういった機会は時代が進行するにつれて、本当に貴重になってきている。
・震災を経験された方から「長田」という言葉が出てきたのがとても印象に残りました。私は大学生から兵庫に来ているのですが、長田区には友達が住んでいるのでよく行くところです。そのため、阪神淡路大震災がとても身近に感じました。
・震災前と後の変化や震災後に重きを置いて話が進んでいったのが、とても印象的で、これまでこのような観点からの話を聞いたことがなかったため、新鮮だった。
・実際に震災を体験された方の生の声を聴くことができ、実際の震災時の様子をイメージ化しやすかった。科学的知見や客観的知見でないからでこそ、伝わる当時の様子があった。それらの意味で、有意義かつ震災を継承する良い映像であると感じた。
・アンケートA6の防災・減災に役立つと思うか、という質問について「あまりそう思わない」と回答しましたが、防災・減災というと災害が発生する前に地域をあげて“あらかじめ”備えておくことの方が有効である、というイメージが強いからです。瓦礫に埋もれた人を救出することや水食糧の配布、自宅のお風呂を開放するなどによりケガや飢えによる被害を減らすことはできますが、あれほどの大震災に見舞われると自発的な行為だけでは不十分だと思うからです。森崎さんの震災直後の行動が1995年以降に他の地域で発生した災害で具体的にどのように生かされたのかが分かる内容が含まれていれば「防災・減災に役立つ内容だった」と評価できたと思います。森崎さんのお話は被災したときの気持ちの持ち方や立て直し方について非常に役に立つ内容であり、支援してもらう事ではなく、被災者の一人にもかかわらず自分がどのように人々に貢献できるかが語られている点が素晴ら

しいと思いました。

・テレビで見るものは、当時の地震が起きた際の映像が多いので、被災者の実験やその時・その後の気持ちの変化などが知れてよかった。
・何かしましょうか？ではなく何かが出来るのでしましょうか？と相手に訪ねた方が相手にとっては助けてもらったときを想像できて頼みやすいのかなと感じました。
・悲惨さだけではなく今の世代にも通ずることを伝えようとしている点において、今まで見てきた震災関連の映像とは一線を画する番組だと思った。
・話し手の言葉が印象的だった。
・今まで阪神・淡路大震災について学ぶ機会はたくさんあったが、この動画は見るとはっとさせられる場面がいくつかあって印象的だった。
・話し手が活き活きと話すため、生の声であることを実感できた。
・実際の体験談が含まれている事でとても説得力があり、伝わりやすかったです。今のコロナの状況に対してのメッセージも心に残りました。
・人が語り継いでいる方が、リアリティを感じられた。
・実際に震災を経験された方のお言葉には重みがあると思いました。
・神戸の長田に住んでいるため、震災に関するお話は小学生のころからよく耳にしていました。そのため、動画内の話は聞いたことのある内容でした。しかし、何度聞いても、地震の恐ろしさを考えさせられます。
・この方の話し方には魅力があった。
・話し手の人の心の声が本当に良く伝わる映像だったと感じる。あまり動画の加工などがされていなかったが、それが逆にリアルさを伝えることができたのだと思う。
・話し手のひとが印象的だった。

④個々の事実やエピソードなどについての記述を含む回答

・近所の奥さんが咄嗟に叫んだ「みなさん大丈夫ですか」と言う言葉が周囲の人たちを安心させたということに感動した。もし万が一自分が同じ状況下に陥った時、自分のためにも、周囲の人のためにも、周りに声かけをしたいと思った。
・私は中学生の時、福島県の隣県で東日本大震災を経験しました。震度は6強で、地面が波のようにうねるような揺れでしたが、近隣から「大丈夫か」などの掛け声も安否確認をし合うようなこともありませんでした。地域性なのかもしれませんが、兵庫県の皆様の心の温かさを羨ましく思うと同時に、有事の時には私もそのようでありたいと強く思いました。また、「貴方のできることは役に立つ、何一つ無駄なことなんてない」というお話から、辛い経験を乗り越えた皆様の強さが見えたような気がして、とても奮い立たされました。
・この動画を見て、１番私が印象に残ったところは、震災が起きた際、自分のことや家族のことで精一杯なのにも関わらずある１人の女性がみんなに向かって「大丈夫ですかー？」と大声で叫び、周りも大声で「大丈夫ですー」って場面が１番人の優しさが出ており、１人じゃないと気付かせるとてもホッとする場面だと感じました。
・森崎さんが動画内で、震災時に周りの人が「大丈夫ですかー」という声などをきいて、ほっとしたとおっしゃっているところがとても印象的だった。相手の安否確認にほっとしたのでなく、声が聞こえたこと自体に安心感を覚えたといっており、森崎さんの言葉と表情をこの番組で見ると本当に気持ちが伝わってきたように感じた。様々な角度から森崎さんの表情を映していることからも、その時の状況や心情がよく伝わってきた。

・ちょっとでも助かるの「ちょっと」が自分の持っているものかもしれないという言葉が印象的でした。
・「自分が持っているもので人を少し助けることができるかもしれない」という内容の言葉が印象的だった。
・「不安を力に変えていく」という言葉は、非常に印象的でした。この言葉から、”自助・共助”の大切さを改めて感じることができました。講話でもあったように、共助を行うには、まず自助が大切です。だからこそ、緊急時に備えて、普段から準備を行うことが重要であると感じました。私は、近い将来訪れるであろう南海トラフ巨大地震がすごく怖いです。でも、備えることは、いざという時に冷静に対応できます。阪神淡路大震災での経験を教訓に、南海トラフに備え、今持っている不安を力に変えたいです！

⑤生き方、価値観、思考、行動の変化などの記述を含む回答

・漠然と「なにをしたらいいか」と聞くのではなく、「これができる」という言葉をかけるべきであるということはとても印象的であった。また、これからの人生において自分の価値観が大きく変わることがあった時、そこからなにを学ぶか、そこでどのように自分が変わったかを気づく必要があるということについて震災に関わらず学ぶことができる内容であった。番組を見て、勉強になりました。ありがとうございました。
・これからの生き方に少し影響を与えるような番組だと思いました。
・話し手の方が、経験してきたことで何一つとして無駄なものはないと言っておられたのをきいて、これからも色々なことに取り組んでいこうという気持ちになれた。
・まずは、自分が具体的に何をしたいのかをはっきりさせなければならないと思いました。
・具体的なことを発言することで、お互いに助け合うことができるんだなということを実感した。また、ちょっとしたことが積み重なることで大きなものになるというお話が印象的で、何事にも小さなことを継続して続けていくことが大切なことだと改めて感じることができた。
・これまでの私とこれからの私が変わったと言えるように、具体的に今自分がなにをできるかを考えて行動にうつしていきたい。このように、震災を経験した人が意識の変化を強く語ってくださることで私のような若者たちが社会のためにアクションを起こせると感じた。
・震災と今のコロナの現状を重ね合わせて、今自分に出来ることは何か、何をしていくべきなのかについて考えることが出来た。
・震災の事実や震災を乗り越えた人々の記憶を継承し、一人一人の人生に素晴らしいことがまっていると感じてほしい、という言葉で震災を乗り越えた方々から希望をもらえると感じた。
・これまでの私を振り返り、これからの人生をより良くするために生きていこうと思った。
興味深い内容でした。
・被災された方のお話を聞いて、本当に大きな地震だったのだと思いました。そして、いつ大きな災害が起きるかわからないし、自分がいつまで生きられるか分からないから、やりたいことはやって、大人になるために変わる勇気を持って一歩踏み出そうと思いました。
・実際に震災を経験したからこそ語れる言葉やその時の情景があり、とても興味深くお話を聞くことが出来た。震災を経験する前の自分と後の自分は変わったと仰っており、どんなに辛い経験をしたとしてもそこから必ず得られるものがあり、更に自分を成長させられる機会だと思った。
・自分にしかできないことを見つけ行動すること

の重要性を学んだ。それは他者とのコミュニティを構築することにもつながり、自分の可能性も広げることができる。現在コロナの影響で多くの人々の気持ちがネガティブになっているが、こういう時こそ自分にしかできないことを探し他者に届けることができるように、考えて行動していこうと思う。

・自分に活かしていきたいです。
・被災者のお話を聞く機会があまりなかったため、当時のお話を聞けたことで、イメージしやすかったです。いつ大きな地震が起きるか、いつまで自分は生きれるか分からないため、やりたいことはやって、大人になるための変わる勇気を持とうと思えました。
・人と人との繋がりは心の支えになるのだと思った。今この状況にいるのは自分達だけではないという孤独からの解放は、安心を与えることが出来る。もし私もこのような状況になっても声をかけあっていきたい。
・自分にできることはしっかりと表現して、相手に示すことが大切だと感じました。
・震災は、人間自身が許容できる範囲を超えた出来事である。そのような中で、地域住民との助け合いが、重要であると考えました。
・阪神・淡路大震災の経験で得た、不安を力に変えることは現在の私たちにでもできるということにものすごく共感した。やってみることに価値ありだと感じた。
・一人一人ができることを持ち合って、それが大人数になれば、大きなことが成せるということが分かった。
・震災とは悲惨で、悲しい出来事しか生まないと今までは感じていたが、森崎さんのお話にあったように震災直後の地域住民同士の声掛けがどれほど人々に安心感を与えたか、またその声掛けによって地域コミュニティがどれほど大切であるかという点を改めて考えることが出来た。また、震災という出来事を通して、その事実だけではなく、森崎さんの「無駄なことは一切ない、全てが自分の財産となる」という言葉は、三回生で就活に対して不安や、迷走を繰り返している私自身にとってとても心に響くものがあった。何事にもまずはチャレンジして、失敗、成功関係なくそれらは自分の価値になっていくということを心において頑張っていきたいと思えるようになった。
・自分の可能性は他人から言われた時に、今まで気づかなった新しい自分の可能性を見つけることができるのだと感じた。
・私自身阪神淡路大震災を経験していないので貴重なお話が聞けて大変勉強になりました。このお話をきっかけに生活を直してみたいと思いました。
・自分が経験していない過去の出来事を知り、未来に生かすことは重要だと思った。
・災害などで被害を受けたときこそ、人として成長できるような人間になろうと思いました。
・自分にできることは何か、意識した生活を心掛けようと思いました。
・自分のできること・強みを自分自身が認知することでヒトの役にたつと思った。自分を知ることも重要だなと思った
・震災に遭った際、一人になるではなく、皆が集まって、お互いに信頼しできることをやります。その中からやりがいが生まれ、新たな人間関係の構築ができると思います。
・何かできることありませんか？と聞くのではなく、○○できます。しましょうか？の方が確かに頼りやすいなと思いました。みんなが困っている時に動ける人はすごいなと思いました。私もそんな人間になりたいです。
・地域とのつながりが大切だと改めて感じ、自分は何ができるのか考えるきっかけとなりました。

・未熟でもよいから、自分の強みを活かして周囲の役に立てるような具体的に自分の出来ることを積極的にする、ということが印象的でした。私も自分の持っているものを誰かのために使いたい、と考えさせられました。
・何が出来るかを尋ねるのではなく、これができる！というような具体的な事を提示した方が耳を傾けてくれたという話は今後実践できると思った
・震災を経験したくないが、自分が変わるきっかけになるのかと思った。
・自分の持ってる仕事を行うことでやりがいが生まれ、拍車がかかることで自分が成長するきっかけになるのだと学んだ。
・過去のことだと割り切ることは良くないと思った。

⑥災害への備え、防災、教育などの記述を含む回答
・近いうちに南海トラフが起きると言われているので、実際に震災を経験した方の話が聞けたことが貴重であると感じました。
・小学校の時に全校生徒で毎年被災された方のお話を聞いていたので、被災したことのない人には必要な経験だと感じる。
・災害は忘れたころに来るので、時々は避難道具などを確認しなければならないと改めて感じた。
・人助けをする時は具体的に何ができるのかを伝える事が大切だと感じた。
・阪神淡路大震災の経験から、私も強い危機感を持つことができた。
・動画を視聴し、改めて近所の付き合いや繋がりは大切だと感じた。
・経験してない人にも地震の怖さを伝えれるいい番組だと思いました。
・自助共助、レジリエンスを感じる内容でした。特に、自分の強みや得意とする事で貢献することの大切さを痛感し、自分の街が被災したとき自分はどのように貢献できるかを考えるきっかけになりました。
・誰かの助けに応えたい時、自分が具体的に何がその人のためにできるのかを伝えることが必要であることを学ぶことができた。
・この番組を通して、一人では無力でもコミュニティにおいては小さな力が連鎖して、様々なことが可能になるということが分かった。そのため、今後地震が起きた時には自分ができることを率先してやろうと思ったと同時に、普段の生活でもコミュニティを大切にしていきたいと思った。
・この動画の当事者は震災を通じて新しい自分になれたと言っていたが、このような強い人になりたいと思った。３，４年前に大阪で起こった地震でさえ揺れが強く怖かったのに、阪神・淡路大震災はそれとは比べ物にならない揺れを感じると考えるだけでも、怖いので、いつ災害が起こっても大丈夫なように、日頃から準備をして家族とも話し合っておく必要があると感じた。阪神淡路大震災が起こった映像だけを見てきたので、当事者の体験談を聞けてことは貴重だと思う。
・一人の勇気がたくさんの人を救うことができいることを実感した
・改めて災害の怖さを知った。備えれることはすべて備えたほうがいいと思った。
・この授業の受講者のみならず、関学の学生みんなに見てもらって、実際に震災を経験された方のお話を聞いて、防災の意識を高めてほしいと感じた

⑦震災の記憶継承の意義などの記述を含む回答
・少しつらい気持ちにもなりましたが、後世に受けついでいくべきものだと感じました。

・阪神・淡路大震災を私たちのような世代や後世に伝えていく重要な映像であると感じた。
・辛い体験をした人々の気持ちは全員が理解できるわけではないと思うが体験を次の世代に伝えることは大切なことであると思った。もし自分が体験したらということを考えることができた。
・私は阪神淡路大震災を経験していないので、このような人に阪神淡路大震災の教訓や恐ろしさを伝えることはいい機会であると感じました。
・実際に震災を体験された方のお話は、より人々に伝わりやすいと思うので、これからも語り継いでいただいてほしいと感じました。
・語り手さんの熱い想いが伝わってきました。その想いを受け継いでいくことが大切だと思いました。
・当時経験されたお話を聞く機会はこれからも作り続けるべきだと感じました。
・震災を忘れないように人間が語り継いでいくことは大切であると思った。
・阪神淡路大震災は忘れてはいけないことであり、これからも受け継いでいかないといけないということを強く学んだ。
・実際に震災を経験された方のお話は、ニュースなどで見る内容だけでなくより深く聞くことができるのでさまざまな形で伝えていくことが大切だと感じました。
・震災を風化させてはならないと感じた。

⑧災害経験の継承の困難さの記述を含む回答
・東日本大震災が起きたので風化されてしまっている部分が少しあると思った。
・震災は身近なものであるが、経験値が物をいうもので、個人的に災害として受け入れていく他ないように思える。
・地震の恐怖は経験した人にしかわからないのだと感じた。
・体験談がリアルであるものの、何度か聞いたことがあるようなものも混じっていた。

⑨番組の形式、表現手法などに対する評価や意見
・授業の一環として見させられるのであれば問題はないが、１人の話し手がずっと話している構成は見ていて集中力が途切れやすく、起伏もなく話すのはダラダラ話しているような印象に受け取られる可能性もはらんでいる。製作者が話し手のここは聞いてほしいと思うところにはテロップ処理を施す、当時の震災の状況の映像を差し込む等改善の余地はあったと思う。
・映像がずっと一定で面白みがなく、実際の被害の写真や映像を途中で差し込んでほしかった。
・語り手の方の話が聞きやすかった。
・絵面が変わらなかったので長時間だとしんどいと思った。
・深刻な様子や新たな気付きが合ったということは理解できたが、いきなりインタビューが始まり、ずっと男性の話が続くという構図だったので、全体的に何について話しているのかがわからず、頭の中を大変整理しにくいうえ、視聴者自身がそれぞれで考察などを行うには少し不親切であると感じた。風化を防ぐために視聴者にこの歴史的な事実をしっかりと受け止めてほしいという意図のもとつくられたのであれば、もう少し事前知識や土地勘がないような人の立場にも立ち、彼らのことも考えたうえで番組制作をするべきだと思う。
・非常に興味深く話を聞くことができた。字幕があったり、聞き手の顔や質問の映像もあればよかったのではないかと思った。
・インタビューのみなら映像にする意味はあるのかと思ってしまった。記事でも問題ないのではと思った。
・インタビューの際に、撮影の角度が変化していたので、同じ画面でも飽きなかった。

・視覚障がい者にも配慮して、字幕をつけるといった工夫が必要だと感じた他、話のまとまりごとに一度区切って、小見出し（タイトル）のようなものをつけると、聞き手がもう少し話を整理しやすく理解が進みやすいように感じた。また、ずっと話し手が10分以上話しており、飽きられたり、集中が切れたりする可能性があると感じたので、対談形式などにすることでより飽かず聞けるようになると思った。
・お話されている内容が印象的で、阪神淡路大震災に関わらず「聞いてよかった」と思いました。しかし、タイトルなどから、阪神淡路の内容がもっと多いと思っていたので少し内容がタイトルとずれているようにも感じました。
・話し手の方のセリフをそのまま使うのではなく、編集して大事なところだけを動画にした方がより意図が伝わりやすいのではないかと思いました。
・震災を経験した者の体験談と、それを通して変わった人生観を話す番組としては優秀だと思う。
・もっとインタビュアーが質問しているところから写し、会話のキャッチボールが見受けられたら、内容がもっと入ってくるのだと思いますが、一人語りの印象が強く、話の焦点が掴みにくかったです。
・所々映像がズームイン、ズームアウトされていて見にくかった。また、テロップや内容についての表示がされていなかったため、見にくい映像となっていた。ナレーションなども含まれておらず、単調とした映像だったため、つまらない映像となっていた。
・阪神淡路大震災の話と聞いて被害状況などの説明かと思ったら、個人の心理的状況にズームインした番組で驚きました。最後まで退屈せず出演者の意見を取り入れたくなるような番組でした。
・実体験を話すシーンで、何の加工も合成もされておらずただ話している場面だが、だからこそ話がリアルに聞こえた。
・もう少し映像に変化があれば刺激があって引き付けられるのではないかと思いました。
・語り手だけの映像ばかりだと、段々と伝えたいことが何なのかが分からなくなってくる。
・阪神淡路を例とした記憶継承番組であるが、途中から話題が違う方向へ行っている気がした。
・ただ話している動画だったが、部分部分で顔の部分をアップさせて表情がはっきりわかるシーンが流れていたところは非常に印象深かった。
・冒頭から突然話が始まったので理解するのに時間がかかった
・震災後の助け合いの部分や社会貢献について学ぶところはあったと思う。ただ、防災や減災につながるかには疑問が残った。
・途中から阪神淡路大震災での経験ではなく人生観について話していたように感じたため、結局何が言いたかったのかあまりわからなかった。他にも、喋っている内容のイメージが湧きにくかったため、もう少し整理された内容であってほしかったと感じた。
・話し手の人の心の声が本当に良く伝わる映像だったと感じる。あまり動画の加工などがされていなかったが、それが逆にリアルさを伝えることができたのだと思う。

別表2-2.「データで語り継ぐ阪神・淡路大震災」視聴後の自由記述回答

①震災への関心、知識、考える機会の獲得についての記述を含む回答

・この番組を観て、考え方が大きく変わり毎日を大切に生きようと強く感じました。
・震災から復興したと思っていてもまだまだ沢山の問題を抱えている事を知って驚いた。これらの問題をもっと伝えていく必要があると感じた。
・阪神淡路大震災の被害を数字で細かく見たことがなかったので、より震災被害の深刻さが分かりました。
・阪神淡路大震災の詳細をデータで知ることができました。
・表やグラフが非常に見やすく、地震の被害の甚大さがよく理解できた。
・知らなかった情報を知れた。
・阪神淡路大震災について知らない情報を知れてよかった
・知らない情報が多かったが、グラフを使って説明してくれていたのでとても分かりやすかった。震災についてあまり知らない人でも、この番組によって情報を得ることができるのではないかと思う。
・知っているつもりだったけど改めて写真やデータで学習できてよかった。
・これまで知らなかった情報を得ることが出来た。
・阪神・淡路大震災についての被害の状況を理解することができた。ひどい有様だったということが伝わった。復興のことについてもデータでわかった。今でもまだ復興していないものがあると知り、驚いた。
・知らない情報がたくさんあってためになった。
・様々なデータを数値で理解することができ、震災の被害の悲惨さがより理解しやすかった。また、今まで詳しく知らなかった新たな情報を沢山得ることができた。
・私自身、関西出身ではないので、今までに知らなかった情報が多く、とてもためになる番組だと思った。
・データから震災について知る経験がなかったのでこれからも印象に残り続ける番組だと思います。様々な角度から取り上げられているので、様々な知識を得ることができました。特に外国籍住民については考えたこともなかったので新鮮でした。
・阪神淡路大震災の様子をグラフやデータで示すことで、当時の状況がわかりやすく理解することができた。阪神淡路大震災は、地震や火災による被害だけでなく、精神的な問題による被害者も多く、様々な面で人々の日常を奪ったことが分かった。
・恐ろしさを知った。
・データで見ることで、改めて被害がどれほど大きかったのか知ることができました。
・番組の中で。様々な情報が提供されましたが、その中でも自分の知らなかった情報が多くあったので阪神淡路大震災についての知識をもっともつべきだと改めて思いました。
・震災に対しての理解が深まりました。
・勉強になった
・今まで知らなかった情報を知ることが出来ました。
・今まで知らなかったような内容が、わかりやすく細かく載せられていたので、勉強になった。
・データから震災の恐ろしさを知りました。
・実際にデータとして見ることで被害の甚大さがよくわかると感じた。また、災害の結果だけでなく、被災者が避難場所で困ったことのデータもあり、これからの備えになると思った。
・今まで知らなかった情報を知れる貴重な番組でした。

・震災に関する細かな数値を知ることが出来た。
・データで見ることで具体的な情報が分かった。
・地震がもたらす私たちへの影響が非常に大きいものであると改めて感じた。
・兵庫県出身ではない私は災害の太枠しか知らなかった。甚大な被害が人々の精神的な面やライフスタイルに起きた事が理解できた。
・この動画も前回も見たが、数値的に震災の恐ろしさや防災の大切さを伝えることが出来ていると思う。数を実際に目で見ることによってその震災の大きさや悲惨さを恐怖という感情を持ちながら感じることができると思った。
・阪神淡路大震災に関してより深い知識を得ることができた。
・リアルな数値を知れて良かった
・震災について理解することが出来た。
・震災の知識がさらに深まりました。
・震災後のデータを知ることができた。南海トラフでは事前に被害を抑えたい。
・今まで詳しく知らなかった阪神淡路大震災の被害状況を知ることができてとても勉強になった。
・知らない情報ばかりだったので、とてもためになった
・自分を長田区に近い場所に住んでいるためすごく身近な話題であった。火災や崩落だけでない表に出にくい問題もあったことを知れてよかった

②個々の事実、問題、エピソードなどへの関心などの記述を含む回答

・災害の重大さや復興過程で生じた社会問題がデータによってきちんと反映されたと思う。
・性被害などがあったことは知らなかった。
・具体的なデータが表やグラフで示されていて理解しやすかった。外国籍の被災者についての話は聞いたことがなかったので興味深かった。
・地震による影響で心のケアが必要になった児童がたくさんいるということが印象的だった。震災時、１番気を配らなければならないのは、幼い子供たちと高齢者であると感じた。
・大震災が起こった直後に、生き埋めになった人らは意外にも救助隊の人が助けたのではなく、身内が多いことに驚きました。
・漠然と長田区の火災がひどく、多くの犠牲者がでたことがあるという知識はあったが、このように的確なデータや情報によってみることにより多くのことを学べるほか、その被害がどのようなものだったのかをしることができた。また、外国人や障碍者、高齢者などに対しての配慮や不安などについてのデータを見ることができたことにより、この頃の配慮のなさ、と自分自身の生活確保にどれだけ必死だったかがとても伝わる印象的なものであった。初めて知る事もあり、驚きました。
・窒息・圧死をした人が77%もいたという事実を知り、胸が痛くなりました。生き埋めになってしまった時は、行政の救助には限界があるので、自力や近隣の助け合いが大切であると分かりました。自分の家族だけでなく、近所の人の安否確認を共にすることが重要であると思いました。
・生き埋めになった人を救助したのは、ほとんどがその家族や知人や隣人であったというお話から、もっと周囲の人に気を配って人間関係を絶やさぬよう心掛けたいと感じました。ただ、数字が多すぎてイメージしづらかったり、選択肢が省略されておらず主題がみえづらかったりした印象でした。もう少し写真や映像を活用することで改善できるように思います。また、図の配置もやや乱雑に感じる部分がありました。
・心のケアについて「５年」というのは、ものすごく立ち直りが早いと思いました。いまだに仮設住宅に住み続けている人がいると聞いたことが

ありますし、ローンの返済を打ち切るに至った理由や、亡くなった子供の年齢を数え続けている方々がいることを考えると、調査の仕方を変えると別の結果が出ることは制作サイドも重々承知のことと思いますので、ナレーションを変えると良いと思います。

- 阪神淡路大震災の時は東日本大震災のような（個人の給与から強制的に３％天引きされるなど）政府の復興予算はなく、義援金もその後の震災より少なかったと思います。そのようななかで、人々はどのようにやりくりをして復興を遂げたのか、また、何が足りなくて三宮周辺はかつての賑わいを取り戻せていないのかが分かる数字も紹介されていると更に見ごたえがあったと思います。
- 神戸市の中で長田区の被害が大きかったことは初めて知りました。阪神・淡路大震災は火災の被害が大きかったことが１つの特徴であると思いました。
- 「生き埋め」といった単語や、生々しい実際のエピソードなどがあり、恐怖心を強く感じました。「包括防災」や「災害弱者」など今まで知らなかった言葉もあり、知らなければいけないことがまだまだあると感じました。
- 被災者などの基礎的な情報だけではなく、生き埋めになった人の救助方法や外国籍住民の死亡数など今まで見たことのないデータが示されており印象に残りました。そのデータから気付かされることも多かったです。
- 震災後のさまざまなサポート（予想以上の量）が被災地の人々を助けたことがよくわかった。どれほど大きな地震だったのかがよく伝わってきた。
- 外国籍住民の死亡数や死亡比率など知らないことがたくさんあり、とても勉強になりました。
- 当時の避難所の数や男女別の死亡者数など注目したことのないデータが多く、新たに知ることが多かった。また、現在も課題が残っていることがよく分かった。
- 混乱に乗じたセクハラがあったことなど、一般的にあまり知られていない情報がまだまだあるのだなと思って、あまり大々的に報じられない情報などもニュースなどで知る機会があればいいなと思った。
- 阪神淡路大震災の規模の大きさを改めて知り、また様々な人が生活を送るのに困難な状況であったことを知り、今ある課題を解決する必要があると感じました。
- 私はこれまで阪神淡路大震災では火事による死者が多いと考えていたが、実際は圧迫死や窒息死によるものが多く占めていることを知って、人々は普段から室内に防犯対策を施しておく必要があるなと感じた。
- やはり震災は、地震による死よりも、火災や建物の倒壊による二次災害による死が多いということを改めて感じました。
- 長田区が甚大な被害を受けていたことがわかり、神戸市の長田区でも被害が大きかったことがわかった。
- 震災があった際には、火事予防の大切さと臨時避難の重要さを心がけるようになりました。そして、事件の後でも、子どもたちの心身状態も軽視できないと覚えました。
- 映像や体験談を見るだけではなく、このようにデータから異なった視点で見ることによって、より震災の悲惨さを再確認できた。水道や下水道が利用できるようになるためには、約３か月必要だと書いていて、水関連に関するライフラインを治すのは時間がかかるなと感じた。
- 災害時女性の方が死亡率が高く、その要因として明らかにされていないセクシャルハラスメントやレイプがあることに驚きました。そして、私は災害時に二度と同じことを繰り返さないよう、この実態を公にするべきだと思いました。

・ライフラインの復旧でガスや水道は２～３ヶ月もかかったということが衝撃的でした。
・外国人が取り残されないユニバーサルな町作りの必要性を感じた。
・この番組は、先ほどとは違い大震災の被害の度合いや、場所を具体的にまとめており震源地が淡路島付近で、長田区が１番被害が酷かったことは知りませんでした。長田区は何度か行ったことありますが、震災が起きた面影はあまり見えなかったですが、映像を見て、被害が大きかったにも関わらず、面影がわからないぐらい、発展して町が復活しているのがとてもすごいと感じました。

③驚き、恐怖、感情的反応などを含む回答
・最近大学に行きだして、よく通る駅などが被害を受けている写真をみて、身近で起きていたことなのだととても感じさせられた。
・地震の細かいデータは初めて知ったので驚くことが多かった
・実際の被害を数字にしてみることができたので、地震を経験してないけど少しは理解できたんじゃないかと思う。
・データを見ることでどれほどの被害があったのかが詳しく知ることができました。
・データを見ることで震災の被害がどれほどだったのかを知ることができました。
・データから震災の悲惨さが伝わった。自分で調べないと知ることが出来ないようなデータもあり良かった。
・災害が発生したときに災害弱者が存在しているということを知りました。またもう復興していると思っていましたがまだまだ復興してるかと言えばそうでない現実があるのだとわかりました。私の今住んでいる地域は、非常に被害が大きかったそうですが、震災の跡があまり残っていないので、着実に復興が進んでいるということを実感しました。
・阪神・淡路大震災の事実が詳しくしれた。特に震災についての知識はあったが震災後については知らないことだらけだったので、知れてよかった。やはり震災は町などを壊すだけでなく、人々の精神、今後の生活状況まで変えてしまうのだと怖くなった。
・阪神淡路大震災に関して、正直大きな地震があった、ぐらいしか知りませんでしたが、具体的な地図があったり、具体的な数値、被害原因が分かり、阪神淡路大震災を少しイメージすることができました。
・具体的なデータを見ることができて見ごたえがあった。
・広い範囲で被害があり一人ひとりの命が大切な中で、弱者の立場にいる人たちの命が多く犠牲になったことに悲しみを感じた。
・衝撃的な内容が多く含まれており、視聴者にインパクトを与えるとこができると感じた。
こっちの方が良い番組だと思いました
・阪神淡路大震災について知らなかったことをたくさん知ることができ、被害の大きさは私の想像以上でとても驚きました。
・災害の恐ろしさを改めて感じ、私たちが知識を蓄えることによって防げる被害もあると思いました。
・被害の数を視覚的に体感できた。自分が住んでいる町も被害に遭っていて驚いた。
・怖いなと思った
・地震は自分の生活を一変させる怖いものだと改めて感じた。もしものことを考えて行動したい。
・地震は恐ろしいと再度思いました。

④生き方、価値観、思考、行動の変化などの記述を含む回答
・データで見ることで、どの場所が被害が大き

かったのか知ることができるので、今後地震が起きた際に何をするべきか考えることができると思いました。

・今まで私が震災の方を学ぶといえば阪神淡路大震災ではなく、東日本大震災であった。そのため、今回の動画で阪神淡路大震災のことを詳しく知ることができて良かったと思う。また、私は震災に関して興味がある。そのためYouTubeで東日本大震災があった直後のニュースキャスターの冷静さや情報を伝える信念などの動画を見たりする。そこから日本の震災への対応能力が優れていることが見れる。これからは阪神淡路大震災の際のニュースキャスターや復興をみて東日本大震災の際と比べてみたいと思った。

・阪神淡路大震災の体験から、地震が来た時はまずは自分の命を守ろうと感じ、余裕があれば人命救助もしたいと感じた。

・私は長田区に馴染みが無かったのですが、阪神淡路大震災において最も甚大な被害を受けた都市だということを知りました。今後長田区に行くことがあれば、震災からの復興を感じながら町並みを見ようと思います。

⑤災害への備え、防災、教育などの記述を含む回答

・避難所の環境をもっと整えていくことが必要だなと思った。日本人ではない人のための配慮や文化の異なる人がいるということを忘れないように気を付けたいととても感じた。ユニバーサルデザインという考え方が、もっともっと当たり前にならないといけないなぁと思った。避難所だけでなく、その後の生活環境などにも配慮してしかないといけないなぁと強く感じた。

・データで阪神淡路大震災の悲惨さを知ることが出来、やはり震災に対してもっと自分も準備をするべきだと思った。

・阪神・淡路大震災での経験からどのような問題に直面していたのか知ることができ、今後いつか災害が起こったときに生かせるようにする必要があると感じました。

・実際の統計からみる客観的知見で説得力があり、当時の震災の凄まじさが数値という“ものさし”を通して深く知ることができ、知らなかったことも多く、ためになった。その意味で、有意義かつ震災を継承する良い映像であると感じたとともに、防災教育や防災啓発などの教材としても有効であると感じたので、ぜひ行政(特に、阪神淡路大震災と性質の似るとされている首都直下型地震の予想被災地域)や教育機関に本映像を提供してみてはいかがでしょうか。

・神戸は地震がない街だと油断していたところに大地震が来たという話がとても印象的でした。きっと地震を他人事のように考えている人は多いと思うので、私も改めて防災に対する意識を強く持たなければならないと感じました。

・私は被害者の構成など、家庭の大人の理解のほどで特に動ける年代の意識の差で大きく前後の世代の生存率は変わると考えている。

・客観視することで、見えてくる結果、因果関係などを把握すると減災、防災に繋がると考えました。

・阪神淡路大震災の悲惨さをとても知ることができた、また地震がいつくるのかわからないので、準備をしたいと思った。

・助け合いの大切さを実感した

・この番組を見て、地震がいつくるか分からないことを改めて知り、自分の家に防災バッグを用意しようと思うきっかけを与えてくれた。

・私たちの年代は、あまり震災を経験していない人が多いので、もっと防災の意識を高めるためにも、この動画を見てほしいと感じました。

・神戸には地震がないと言われていたが、何万人

もの死者・負傷者が出るほどの大地震が起きたことを受け、ハザードマップや巨大地震津波浸水想定図などを信じすぎるのは良くないと改めて思った。100％安全な場所はないと考え、念には念を入れた防災対策に取り組む必要があると気付くことが出来た。震災後でもライフラインや避難所などさまざまな問題が起こることを知った。

・データ化されたものを見ることで、より防災意識が高まると思うので、もっとテレビなどでも放送されるべきだと感じました。
・次世代の道徳教育に活用すべき内容だと感じた。

⑥震災の記憶継承の意義などの記述を含む回答

・阪神淡路震災は、震災直後とその後時間がたち火災による死者など、様々な要因によって死者が出た。その事実は、私たち震災を経験していない若い世代にとっては、知るべきことであり、震災に立ち向かうために後世には伝えていくべき義務があると考えました。
・両親はたまたま出張で他県に滞在していたため被災者ではないが、どれだけ大変だったかという話は小さい頃から聞いていた。特に、動画にもあったように道路や電車等の復旧に時間がかかったことで震災後の生活が大変であったらしく、狭い場所も通れるバイクを勧められ万が一の備えのために取得した。今回数字やグラフで動画を見たことで、改めてどれほどの大地震でこの対策が重要であったか、両親や他の被災者が苦労したのかを感じた。また、心の傷は一生癒えず何年経っても苦しんでいる人がいるということも突きつけられ、決して忘れてはいけない出来事であると身に染みた。
・これから先もこの出来事を語り継ぐ必要があると感じた。

⑦番組の形式、表現手法などに対する評価や意見

・グラフなどを用いて説明されていたので比較的理解しやすかったです。
・詳しい数値までは知られていない内容をグラフなどを用いて、論理的に情報を伝えられていて、分かりやすく、伝わりやすいと思った。
・具体的なデータが多く、わかりやすかったです。
・様々な図を用いた映像であったので理解しやすかった。また、強調したい部分などが良く伝わってきた。しかし、情報元が掲載されていない図も多く信用していい情報なのか判断が必要であると感じた。画面が動いていることやアニメーションが多く使われている点に関しては見にくいと感じた。必要のないアップやクローズ、アニメーションは控えるべきだと思う。
・男女のナレーションがいて聞きやすかった。
・様々なデータを示していくことで、より現実的に震災について理解することが出来て良かった。ただ単にデータを羅列しているだけにも見えるので番組の中でもう少し動きがあると面白いのではないか。
・ナレーターの声が特に印象的で、少し怖いと感じた。あと、数字を大きくしている点では、逆に少しわかりにくいと感じた。
・数値データが少し多いように感じた。
・グラフで説明されると説得力があって良いと思った。
・震災の事実を数値をもとに説明されていたので、とても分かりやすかった。
・データが多く提示されていたため分かりやすく何が問題であったのか理解することができた。
・データを分かりやすくまとめてあったため、目からの情報、耳からの情報どちらの情報も整理して理解することができました。
・データが中心で写真や動画がなく淡々と進んだ。イメージがしづらい。

・標準的だと思った
・良いものだと思いました。
・データの提示が詳しくて分かりやすかった
・非常によくできていると感じました
・ナレーションの方が被災されている方なので、数値以上の情報量があった。
・グラフで表示していたのが本当に見やすかったです。ですが、少し無機的すぎる気がしました。また、震災復興で起こった社会問題にきちんと触れられていてとても斬新だと感じましたし、もっとほかのメディアでも伝えるべきではないのかと思わされました。
・男性の声がやや聞き取りにくい他、いまいちどのような場面で女性と男性の声のすみわけを行っているのかがよく分からず、気になりました。また、当時の被災状況などはある程度伝わりましたが、実際に「じゃあ、実際に私たちはどのような具体的行動をとればいいの？」という部分は気になる部分であり、継承の他に、生活や行動の変革や教訓という意味を込めるのであれば、この部分を入れた方がより効果的な映像になると感じました。
・データをもとに当時の状況を説明していたので、視覚的にも聴覚的にも情報を得ることができたと考える。また男性の声と女性の声を分けているため、いい刺激になった。
・客観的なので、脳に入ってきやすかったです。
・データをグラフ化することで視覚的に当時の被害状況などを知ることができたため、分かりやすかったです。
・データ分析に基づいての意見や感想も含まれていたので勉強になった。
・データでの結果が見られるので分かりやすかった。
・地元なので親から聞いたこともあれば、小学校から学校で聞いているので、知っていることしかありませんでした。
・データで解説する番組としてみるのであれば分かりやすい。
・表やデータがわかりやすかった。
・私見を述べられるより、実際のデータとしてあらわしてくれた方がその恐ろしさを理解することができる。
・ナレーションが２人いたので、印象が強かった。
・データや写真、字幕が相乗効果をもたらしていて、震災を経験していない私にも落とし込みやすい内容になっていたと思います。大きな自然災害を一度でも経験したことある人にとっては１でも強く共感できると思いますが、そうでない人にとってはやはり数字が一番物をいうことは間違いありません。
・表やデータを使用して紹介されたため、非常に分かりやすかった。また、１と同じだが、データによって地震の恐ろしさを再確認出来た。
・グラフや表などが多く、細かなデータが分かりやすかった。
・この番組は先程の映像と違い、グラフやナレーションなどが含まれており、分かりやすい内容となっていた。しかし、ナレーションの声が統一されておらず、なぜ別々にする必要があるのかが気になった。また、男の人の音声が少し音割れしているのが気になった。
・ナレーションを二人に分け、さらに男性のナレーションの音質があまり良くなかったことで、番組への集中力が削がれることが視聴中に何度もあった。視聴者が気になるような要素を完全に排除した状態に近づけることで、この事態を真剣に受けとめ、考える人が増えるのではないかと思う。
・ナレーターの声が印象的で、少し怖い印象があった。でもある意味、震災の深刻さを伝えることはできると思った。
・言葉だけでなくさまざまなグラフなどがあって

分かりやすかったです。
- ナレーション(男性)の声の音質や聞き取りづらさが印象的。そこまでして男性と女性が交互に喋る構成は必要だったのか？と疑問に思う。
- 細かいデータについて知ることができましたが、淡々と進んでいっている感じがしました。データで見ると、とてもわかりやすいところがたくさんあった
- ナレーターの声がロボットみたいで説得力がないと思った。
- データばかりの映像だと、心に響かないし、段々と頭に内容が入ってこなくなる。
- 数値ばかりでよくわからなかった。
- 数値を提示することによって説得力が大いに増えた。
- データで詳細に伝えることも大切である。
- いい番組だと思いました
- グラフなどで数字化された資料を見ることで、阪神・淡路大震災から学びこれからに生かしていくことがより可能になるのではないかと感じました。
- 具体的な数字が多く記載されていたのはとても分かりやすく良かった
- ナレーターの声が怖かったので、印象的だった。でも、そのような声にすることで深刻さなどは伝わってきた。
- 「知識」「データ」という印象だった。
- データにより、震災の恐ろしさが明確化した。
- ナレーションが聞きやすかった。
- 良い番組だと思います。
- グラフやデータが多く使われており、わかりやすかった。
- グラフや文字が書かれていたため、見やすく分かりやすかった。また、過去のデータから今後地震が起きた際に起こる様々な問題に対して何をするべきなのかを学ぶことができた。
  ナレーションの声が怖いイメージだった。
- 経験した方の話を聞くことで、より震災の場面が想像できたり、感情的に地震について考えることができた。Aの動画を見て、確かに被害がどれだけあったかということについて知ることはできたが、数値的なもので見るよりも経験者の話の方が想像しやすかったり、もっと地震について恐怖を感じなくてはと考えるようになった。
- Aの動画は感情に語り掛けられる感覚がしましたが、こちらは多くの情報を得ながら冷静に震災について考えるきっかけになったと思います。Aの動画のように心に語り掛けるような動画も必要ですが、Bのように具体的な数字や多くの情報をもとに冷静に、かつ深くこの問題について考えることができる動画も両方に大きな意味があることを実感しました。
- 長田区という地区がフォーカスされていましたが、長田区という地域について解説があればもっとイメージしやすいのではと思いました。
- グラフや数字で震災について知れた。
- 阪神淡路大震災の被害を明確な数字やデータとして見ることができて、非常にわかりやすい番組だった。実際に災害の被害を受けた人が話されている先の番組とは対照的だった。
- たくさんのグラフデータがあって数などの情報を得ることが出来た。
- 人間によって語り継がれる動画とは違い、数値的に震災の悲惨さを知ることが出来た。しかし、それは数や文字で表されているため、人間が語り継ぐものと比べるとあまり温かみやリアルさを感じれなかった。
- 素晴らしい番組だと思いました。

別表３　第２調査（教室／質問紙調査）の回答一覧

3-1.「人間が語り継ぐ阪神・淡路大震災」に対する感想・意見

・私は今回の動画の中で「ひとり一人にできること」というワードに心を惹かれました。阪神・淡路大震災は経験していないので実際にどれほど大変だったのかは分かりません。しかし今私達は「コロナ」という大きな壁によって今までの生活が送れなくなっています。震災も今もみんなが「しんどい」状況に置かれています。自分だけがしんどいのではないということ、みんな同じ状況だからこそ手を差し伸べあって互いに助け合いながら乗り越えています。動画でもあったようにひとり一人できることは異なります。保育士をしてる人、看護師、力仕事をしてる人、たくさんの人が協力をしているからこそ乗り越えて今があります。神戸常盤大学は専門の学科が多くあります。専門知識を学んでいます。災害がおき、誰かが悩んでいたら少しでも手を差し伸べることができるのではと思います。保育士を目指してる私であれば困っているお母さんを助けてあげたり、子ども達と手遊びをしたり少しでも助けになることがあるのではないかと講義を聞いていて思いました。

・動画を視聴し、人との会話、温かいご飯など日常の何気ない一コマが生きていく為に必要不可欠でありそれが当時の人々にとっての生きる糧になっていたんだと感じました。
何もかもが非日常の中で、そういったことが日常や人々の笑顔を取り戻すきっかけに繋がっていたんだと思います。それは地元の人だけでなく様々な人の助けがあったからこそ出来たことだと思うし、「助け合い」がとても重要なワードだと感じました。こういった出来事でなくても私は普段から、人との支え合い、助け合いは大事だと感じておりこのキーワードが一番印象に残りました。苦しく辛いできごとである阪神・淡路大震災は忘れてはいけないけれど、生きていく為にきちんと自分の中で消化して風化させないという気持ちを持ち行動に移すこと、自分に出来ることを精一杯することが大事だと感じました。

・「地域のいのちは地域が守る」今回私が１番響いたのは共助である。私は長期四国で生活をしてきたのと、1.17を経験していないため、大きな地震や火災などの自然災害を経験したことがない。しかし、神戸市に引越し、この大学に入り、この講義も含め、何度も神戸淡路大震災についてやその後の地域の活性化について学ぶ機会があった。そこで初めて、復興や神戸市の方々の災害に対する強い対策と地域全体での取り組みの様子から、自分の命を守ることの意識の低さに気付いた。今回の講義の初めから何度もスライドで出てくるこの共助の文字を見て、自分のいのちは自分で守る意思はあっても、自分１人では何も出来ないことの痛感と、地域全体で共助する気持ちを一人ひとりが持つことの大切さを改めて感じた。

・私は「それを行動に移す」という言葉が印象的でした。人々は考えていることがあります。それを行動に移すかどうかで震災の時のように人の命に関わってくると感じました。震災の生き埋めになった方の救助法の割合では救助隊よりも周りの人によって救助された人の割合のほうが多く、これは助かった人たちが協力し合い今危ない状況にいる人たちを助けるという行動に移したからです。このような状況だと自分や家族のことでいっぱいだと思います。しかし、当時の人たちは「人を助ける」という思いがあったから救助という行動が出来たのだと思います。そ

の行動がなければ助かっていなかったという人が多かったと思います。一人ひとりが考えを行動に移したこと、思いやりがあったから初対面の人たちと協同することが出来たのだと思います。震災を経験していない私たちも、人を思いやり考えたことを行動に移すという心を持つことが今後に繋がると思いました。

・動画を視聴して私が１番心に残った言葉は１番最後の動画の森崎清登さんの無駄なことはないと言う言葉です。生きて行く中で今までに無駄な時間だったなと感じることや思うことはたくさんありました。多分これからもそう感じることは少なくないと思います。でもこの動画を見てあらためて、私が今まで無駄だと感じていた時間も無駄な時間ではなくなにか私にとって必要な時間であり、貴重な時間であったと再確認することができました。どんなことでも無駄なことはなく必ずどこかでいきてくると考え直すことができました。

・ひとり一人にできること、情報を発信というキーワードより阪神淡路大震災というワードを聞くと、これまでの震災学習での映像や、そのエピソードが思い浮かぶ。私たちは、物心がついたときから1.17は特別な日であり、阪神淡路大震災についてたくさん学んできた。
これらは、震災を経験した方々から語り継がれ、震災イベントに参加し、当たり前の日常は特別な日常であるのだという学びを得られる環境にいたからである。防災というものを考えたときに、経験していない者もその災害の恐ろしさを感じ、実際に被害にあったときどのように動いていくべきなのか、また様々な防災器具の使い方などをしっかりと覚えられる、記憶に残すためには何度も何度も伝え、日常化していくことが必要であると感じる。そのように幼い時から何度も何度も伝えられてきたことで、防災への意識、安心・安全な生活への意識が少しでも高まるのではないかと考える。

・今回の授業を終えて「話し合い」と言う言葉に強く心を惹かれました。なぜこの言葉に強く心を惹かれたかと言うと、動画でも述べておられたように、違った意見を持つ人たちが話し合うことで、次々と新たな意見が生み出され、気づきを発信し、その気づきを形にすることで、安全を培う重要なことにつながるということを改めて感じ、強く心に惹かれました。また、自分の意見を人前ではなかなか言えず小さくなってしまっている人たちの声にもしっかりと耳を傾け、意見を聞き入れ共有し、お互いが意見交換をすることで、さらに安全に繋げていくことができ、協力をすることでより良い環境、安全を作り出すことができ、困っていることが見える人・小さな声が聞こえる人・みんなの違いに気づける人、これが命を守る、安全を作り出す人であるということを学びました。

・私が特に心惹かれた場面は、二つ目の動画の経験者の方が語ってくださった中にあった「地震発生直後に近所の奥さんが『大丈夫ですか！』と声をかけてくれた」というところと、三つ目の動画の学校での避難生活が続く中で救援物資をもらってと「糖尿病なんです、アレルギーなんです」と言えない、校内放送が聞こえない、言葉の意味が理解できないという方達がいた、ということ。大丈夫ですか、という言葉は何か特別な言葉ではないが、それでも心が救われる人がいると知って言葉かけの大切さを改めて再認識することが出来た。また、二つ目では、支援してもらってる立場で自分や家族のことを言い出せないといった思いがあったのだろうと思う。言葉にしないけど考えていることを読み

取ることの重要性というのは看護にも共通するものであるため、印象に残った。

・私は、阪神・淡路で生まれたという「水を自由に使ってください」という言葉に惹かれた。この場面に惹かれた理由として、この文字を書いた人も地震によって不安や恐怖、苦しい思いをしていたと考える。さらには、災害により、水も止まっていただろうから自分に必要不可欠で、貴重な水であったと思う。しかし、それでも自分の周囲の人も困っているだろうと考え、自由に使ってくださいと張り紙をするという自分だけではなく、災害時にも困っている周りの人々ことを考えて、さらにそれを行動に移していたことに惹かれました。

・25年ぶりの語りの動画にあった、地震が起こった後に近所の奥さんが「大丈夫ですか」と叫んだというところに惹かれました。まず、このような声かけはやろうと思ってもなかなか行動に移すことが難しいと思いますが、それを行動に移して周りの人たちのいのちを守ることに繋がるのではないかと思いました。これは横断歩道で子供たちのために旗を持って立っている人たちと同じようなことだと思いました。

・今回の動画を視聴し私の心が惹かれた場面は生き埋めになった人がどのように助けられてきたかを示したパーセンテージの表です。この表を見て、自身自身の力で脱出した人、家族に救助された人、友人や隣人に救助された人たちの割合が全体の95％も占めていることに非常に驚きました。この表を見て、自分自身の安全や命、地域の安全や命を守るためには普段から当たり前ではあるが地域の人たちとの交流や道端ですれ違った際には挨拶などを行い、良い関係性を築いていく重要性を痛感しました。また、地域の人たちとの交流をしっかりと行いコミュニケーションをとっていれば未曽有の災害時にもしっかりと地域の人たちと連携して危機を乗り越え、災害に強い街づくりができるのではないかと感じました。

・「無駄なものは一切ない」という森崎清登さんの言葉が、動画を見てとても心惹かれた。実際、自分が生きていく中で、これは無駄ではないかということはたくさんあった。例えば、小さいころゴミ拾いをしていて、「ここで今拾っても、また誰かがポイ捨てをするのではないか」と考えてしまうことがあった。しかし、大人になるにつれ、ゴミ拾いを少しでもすることで、それが積み重なり、地球環境がよくなり自分を含め周りの人も助かることであると分かった。このように小さいころから今まで、無駄だと思っていたことは、どこかで役立ったり誰かの助けになったりすることがある。森崎清登さんのこの動画の言葉から改めてこのようなことを学ぶことができた。

・今回の動画視聴で私は、森崎清登さんのお話の場面が強く印象に残った。やはり当時の生の現場を体験した人の語りというのはとても心に響いてくるように感じた。やはり当時の人は大地震についての予備知識や、実際起きたらどうなるのかの、リスクをあまり考えれていなかったのではないかと、この人の語りを聞いていて感じた。地震かどうかもわからない時点で安全という考えが全て排除されるのだと考える。電気がなんとか通っていて、テレビが見れていたと語っていたが、すぐ行けるはずのところが、みるに耐えないような光景になっていることはとても怖いと感じた。その時何が安全かすぐに考え出すことも困難だっただろうと考える。現在では、このような目に見えてしまう禍ではな

く、目に見えない不安というものが横行してしまっている。その時に何を最優先にするか、私なら教員を目指すものとして、どのような行動が最も安全なのかを考えたい。

・私は、動画の中ででてきた、ちょっとでも助かるのちょっとが大きいという言葉が印象に残った。災害や困ったことがあった時に、少しでも助けようとしたり動こうとすることはちょっとのことでも人の役に立ち、必要なことなのだと感じた。自分の積み重ねてきた経験と、知識を生かしてもし何かあった時には助け合い、動きたいと考える。日本は地震などの災害が多く、いつどんな時に起こるかわからない。最大限の準備と災害に対する備えをしておく必要がある。そして、もし起きてしまった時には、少しのことでもいいから人のために動くことが大切だと学んだ。

・私が今回の授業を聞いて特に心惹かれた部分は、森崎清登さんのお話の中の地震後の近所とのやり取りである。近所から「大丈夫ですかー？」という声に他の近所の人が「大丈夫です」という声が聞こえてきて安心した、ほっとしたということや、自分たちだけ孤立しているのではなく、他にも人がいてみんな無事なのだと知ったという場面である。私がこの場面を選んだのは、不安な時こそ誰かが傍にいるとわかることや、無事だと知ることで少しでも不安が晴れ安心できるということである。今の時代では、小さな地震から大きな地震まで多くある。いつ起こるかわからない自然災害の中で人と人とのつながりは大きな意味があり、みんなで助け合う、みんなで呼びかけ合うことなどが大事だと考える。

・25年前の地震について語る映像はとても印象に残っています。近所の奥さんが「大丈夫ですか」と声をあげていたのを聞いて安心したという話を聞いて、このように誰もが不安な時に声をあげられる人というのはとても凄いと思いました。その何気ない一言を挙げることでたくさんの人が救われると思います。また、たくさんの人達との助け合いが生き延びることに繋がったと話されていて人と人が協力し合うことは何かを成し遂げる上でとても重要な事だと感じた。データや数字から見ることも大切だがこのように当事者の話を聞くことで当時のことをより鮮明に知り、学ぶことが出来ると思う。

・私が動画を視聴して特に心惹かれた場面は、森﨑さんの「自分のできることを勇気を持ってやってみる」という話の場面です。なぜこの場面に惹かれたのか考えてみると、自分自身が行動に移す勇気を持っていないからではないかと思いました。今の私は、興味のあることややってみたいと感じたことがあっても１人では行動に移せません。周りの子に聞いて、同じ考えの子がいなければやめてしまいます。森﨑さんのお話を聴いて、このままではいけないと考えました。今の時代、インターネットやSNSが発達したことで小さなことでも自分ができることを発信していくことが可能です。例えば、私と同じように大学がオンラインになったことで不安が募っている人がいると思います。そのような人たちとのコミュニティを作って、お互いに悩みを解決できるような場所を作るなど行動する勇気を持つことが大切だと感じました。

・阪神淡路大震災の際、「家族の命を守らなければ」と散乱したテレビなどはそっちのけで考えていると、近所の奥さんの「大丈夫ですか」という声が聞こえて、ほっとしたという話に私は特に心を惹かれた。自分だけが孤立してい

ない、誰かがいる、というのが分かるだけで安心するといった経験が私にもあるからである。自分が不安を感じているとき周囲に人がいたり声をかけてくれたりするだけでとても安心する。「私は一人じゃない」と感じられ、心が落ち着く。現在はコロナで人と関わることが困難になった。感染を防ぐという観点で安全は保たれているが心は寂しく感じることがある。安全を守ることは大切であるが、本当にそれだけでよいのか、心の安心はどう保つのか課題だと思った。

・私は動画の中で清登さんが仰った「被災したときに人の声を聞いた瞬間ホッとした」という場面である。まずこの話を聞いて「大丈夫ですか」と叫んだ女性はすごく他人想いの方なのだと思った。大地震をまだ体験したことがないが、仮に体験したとするとまず自分の命を守ることや家のことで手一杯になってしまうだろうと感じたため、自分であれば咄嗟に周りの家のひとたちのことは考えられないだろうと思ったからである。今の新型コロナウイルスでも同じことが言えるがまず自分の身を守り、次に他人を思いやった行動が求められる。その女性のような周りの人の安否を確認した行動は清登さんが実際に声を聞いてほっとしたように他人を思いやる行動である。そしてそのようなことこそが、してもらった側にも影響を与え、「支え合う」ということのきっかけになっていくのではないかと感じた。

・1995年１月17日発災「阪神・淡路大震災」25年ぶりの語り。森崎清登さんの動画を見て、女性が「皆さん、大丈夫ですか」と大きな声で言ってほっとしたといった場面に惹かれた。この場面に惹かれた理由は、大きな声かけをするというのは多くの人が出来ることであるが、地震直後といった不安や孤独を感じる場面でその声かけが出来るのは周りの人にとって大きな救いになったと考えるからである。食べ物を配る、瓦礫の中から人を救い出すといったことは大きな援助になるが、声かけをするなどといった小さなことでも自分に出来ることを探して、それを実行するというのは、多くの人を安心に導くことが出来る。こういった場面で、パニックになると思うが、その中でも私も少し周りを見て声かけをするだけでも共助になると思うので少しの勇気、気配りをしたいと思う。

・私は阪神淡路・大震災の画像として高速道路が倒れている画像が一番印象に残っている。小学生の頃に阪神淡路大震災について授業を受けた時に見た写真だからであり、柱の太い高速道路が倒れるほどの大きな地震だという事が見た瞬間から伝わるからである。しかし、当時は写真を見ただけですごい！と感じるだけであり、災害後の事などはあまり印象には残らなかった。しかし、今回森崎さんの話を聞いて、近所の人の声（自分のみに発せられた言葉ではなかった）が森崎さんの心に安心を与え、冷静になれたんだと思った。また、周囲の人の助け合いによって、不安を力に変えていくことができたと述べていた。新型コロナウイルスで３密を防ぐことで安全は守られているが、安心を作るのはやはり、他の人との繋がりであるという事を理解する事ができた。

・1995年１月17日発災「阪神・淡路大震災」25年ぶりの語り，森崎清登さんの動画での，女性が「皆さん、大丈夫ですか」と大きな声で言ってほっとしたといった場面に特に心惹かれた。理由は，大きな声かけをするという，多くの人が出来ることその声かけが，地震直後といった不安や孤独を感じる場面で周りの人にとって大き

な救いになったと考えたからである。食べ物を配ることや，瓦礫の中から人を救い出すといったことは大きな援助で出来るかと問われると分からない。しかし，声かけをするなどといった自分に出来ることを探し，それを実行するということは，誰もが多くの人を安心に導くことが出来るだろう。このような出来事があるとパニックになると思うが，周りを見て声かけをするだけでも共助になると思うので少しの勇気・気配りをしたいと思った。また，声を出すことは自分自身の不安も減少することにも繋がる可能性があると考える。

・私は動画の、地震発生直後に近所の人に向けて「皆さん大丈夫ですか」と声をかけた人がいたという話に心を惹かれました。なぜその言葉に惹かれたのか考えると、私にはその行動ができないなと思ったからです。自分も地震を経験したら怖い、何が起こったのかわからない状態に陥り、自分や家族のことで大変な状況で以外の近所の人の心配までは絶対にできないと思います。私は自分を中心に物事を考えてしまうときがあります。震災が起きているその場にもし自分がいたとしたらどのような行動をとっていたのか、すぐに人を助ける行動に取り掛かることができるのかなと考えました。状況の理解ができずに呆然としていたり、自分を守るために避難をするということもあり得るなと思いました。この近所の人に声をかけた方のような緊急事でも周りの事まで考えられるということはとてもすごいことだと思いました。

・私は、森崎さんの「人の声を聞いて安心した」という言葉に心惹かれた。この言葉から、人は安全を求めるが、安全とは、実質的な危険がないことだけでなく、心が安定していることだと学ぶことができた。互いの安全を守るため、互いを思いやる助け合いの心を持ち、声を、手を差し出す必要があると思った。震災だけでなく、今のコロナ禍の状況でも同じことが言えると思った。自分にできることを考え、行動に移すことが、今私ができることだと考える。困っていることが見える人、小さな声が聞こえる人、みんなの違いに気づける人になりたい。このように、森崎さんの言葉から、自分の安全に対しての考えを深めることができたからこの言葉を選んだ。

・私が特に心を惹かれた場面は動画で近所の女性が「皆さん大丈夫ですか？」と大きな声で呼びかけている人がいたと言われていた場面である。なぜこの場面に惹かれたか、それは、話されていた方（以下、森崎さん）もそうだが、まず自分や家族の命のことで精一杯になることが一般的な状態であり、周りの方の心配をすることはそう簡単にできることではないと考えたからである。私もきっと自分のことで精一杯にだろうと感じる。一人の言動で森崎さんだけでなく多くの人の心が少しだけでも救われたことは間違い無いだろう。私にこの女性のような行動をできる自信はまだ無いが、震災のように大きな出来事でなく、なにか些細な出来事の場面で周りを安心させるような行動をできるような人になりたいというように考えた。

・1995年１月17日発炎「阪神・淡路大震災」25年ぶりの語り。森崎清登さん編の動画の中で、印象に残ったのが「自分が生きてきて経験したことに無駄なことなんてない」。不安や災いを力に変えていく事が重要であり、自分１人ではなく多くの人が未熟なものを持ち寄る事でそれぞれが持っているものが何か系口に繋がる事があるという部分である。理由として課題に対し１人で抱えるのではなく気づいた人が声を出してい

く、発信していく情報を形にしていく事で、声の小さい人の声を聞き、困っていることが見え、問題解決につながるのだ。それが命を助ける事や安全を作る事に大切だと学ぶ事ができたからである。また自分の考えている事や意思を人に伝え、行動を起こすことは勇気がいると思う。しかし、その不安を抱えてながらでも、周囲と共有することは誰かのためになると自分の経験や持っているものに対し少しでも、自信をもつ事も必要だと感じたからである。

・2つ目の動画で、ご近所の奥さんの「皆さん大丈夫ですか」という声で、自分たちだけじゃないんだと思いほっとしたという話が印象に残った。阪神・淡路大震災という初めての大きな災害でなにがなんだかわからない状況でも、ひとりじゃないんだという、誰かがいるとわかるだけで、安心できて落ち着くことができるという人間の心理に心が惹かれた。命を守るということは協力するということでもあるのだなと感じた。自分たちだけでは守りきれないところを、地域の人や周りの人がいることで自分自身も、周りの命も守ることが出来るのだと感じた。

・私が動画を見て心惹かれた場面は、２番目の動画の方の話です。実際に震災を体験した人の話は生々しくて、現実的で印象に残ったからです。その中でも、地震のすぐ後近所の方が「みなさん、大丈夫ですか」という声にホッとしたしたという言葉が印象に残りました。そこで、周りに声をかけられる近所の人もすごいし、その声によって孤立していないのだと安心したということを聞いて、その方の声かけはすごいと思いました。その方の声かけのおかげで、周りの人の安否確認ができ、もし返事がない人がいたら助け合えるという声かけができていて、その方も被災した直後であるにも関わらず冷静だと思いました。もし、私がその場にいたとしても驚きすぎて声をかけることはできなく、動画の方と同じように周りの方の声でホッとするという側だと思います。そこで、私も周りの方に声をかけ、周りの方をホッとさせる事ができるようになりたいと思いました。

・阪神・淡路大震災から25年の語りの森崎清登さんの体験談の屋根が落ちているのにも関わらず、自分の命よりも子供の命を優先して子供を守った。という言葉が心惹かれた。この言葉を聞いて大人が子供を守るのは当たり前だと思われるかもしれないが、阪神・淡路大震災は震度７のとても大きな揺れで街の建物がほとんど崩れて火災も起きたくらいの大規模な地震である。そんな大地震は地震国と言われる日本であっても人生の中で経験するかしないかの大地震だと私は思う。経験したことの無いような、さらに１人でたって歩くのも難しく、いつ周りの建物が崩れ落ちるか分からないし恐怖もある中で咄嗟に子供を守るということが本当にすごいなと思って私はこの言葉に惹かれた。

・「近所の人が『大丈夫ですかー？』とゆっていた」という場面が印象に残りました。実際に私は体験していませんが、私自身がこのような場面に直面すると、近所の人の声掛けによって少し気持ちが楽になるのではないかと思いました。震災というものによってたくさんのものを失ってしまいましたが、このような人の温もりをたくさん感じることもできたのではないかと思いました。安全とは安心して暮らすことができる、ということだと知りました。安心に暮らしていくためには、自分一人の力だけではなく、家族、近所の人、その他たくさんの人と共に助け合って、自助、共助、公助が大切だと分かりま

した。この中でも、自分の安全だけでなく近所の人の安全も確認している、共助が感じられる場面だったため、この場面に惹かれたと考えました。

・私は、森崎清登さんが動画の中で話された１つのエピソードに心を惹かれた。それは、地震直後、女性が「皆さん、大丈夫ですか。」と近所の方々に声をかけたというものである。このエピソードに心を惹かれた理由は、もし現代社会で同じことが起きた場合、この女性のような行動をとる人がいるのかと感じたからであると解析する。なぜなら現在、都会やマンションなどでは、隣人の顔を知らない、話したことがないという人が多く、昔のような近所付き合いを行う人が少なくなっている。また、周りの人ことより自身のことを優先して考える人が増加しているように感じる。このような社会で、もし地震が起き、自身の体が命の危機にさらされた時、女性のように近所の方々のことを考えた行動をとる人は少ないのではないかと考えた。そのため、森崎清登さんの上記のエピソードに心を惹かれた。

・私が特に心惹かれた場面は、森崎清登さんが震災当時のことについて語っている場面だ。その中でも特に、地震が起こって孤立状態になっているときに聞こえてきたご近所の奥さんの声を聞いてとてもホッとしたという話が印象に残っている。なぜその言葉が私の中に残っているのかというと、そのご近所の奥さんは自分も被害にあったのにもかかわらず、周りの人を心配してそういう発言をできるのは本当に素晴らしいことだなと思ったからであると思う。また言葉には、人を助ける力があるんだなと感じたからだ。このことは、コロナ禍である今にとても必要なことだと感じた。自粛、またステイホームを要されている今、会って直接助け合うということは難しい。だが、励ましや前向きな発言をするといったように言葉で助けていければ、少なくとも精神面では助け合いができるのではないかと思った。

・森崎さんが「地震が起こったときに近所の人に声をかけてもらってホッとした」という言葉がとても心に残った。なぜだろうと考えたときに、最初に言っていた共助という言葉を思い出した。大きな地震が起こったあとに、誰もが必ず不安になっていると思う。その中で近所の人が安否確認で声をかけることにより、不安が少しでも和らいだということが、森崎さんの中でもとても大きかったと思う。自分は高校のときに修学旅行で東北を訪れた。そこでも、現地の人は「当たり前が普通でない」とおっしゃられていた。当たり前であることに感謝し、一日一日を過ごしていきたいと思っている。

3-2.「データで語り継ぐ阪神・淡路大震災」

・データでみる阪神・淡路大震災にあったように、生き埋めになった人は自力や家族、友人、隣人に助けられたとあったので、このような声かけは安全といのちを守るの両方のためにも大事なことだと思いました。

・今回の動画を視聴し私の心が惹かれた場面は生き埋めになった人がどのように助けられてきたかを示したパーセンテージの表です。この表を見て、自身自身の力で脱出した人、家族に救助された人、友人や隣人に救助された人たちの割合が全体の95％も占めていることに非常に驚きました。この表を見て、自分自身の安全や命、地域の安全や命を守るためには普段から当たり前ではあるが地域の人たちとの交流や道端です

れ違った際には挨拶などを行い、良い関係性を築いていく重要性を痛感しました。また、地域の人たちとの交流をしっかりと行いコミュニケーションをとっていれば未曽有の災害時にもしっかりと地域の人たちと連携して危機を乗り越え、災害に強い街づくりができるのではないかと感じました。

・心惹かれた部分　今回の動画で、特に印象に残った(心が惹かれた)ところは、「阪神・淡路大震災の被害総額と内訳」です。理由は、阪神・淡路大震災で多くの人達が被害に遭い、二次災害の火災なども人々に猛威を奮いました。そんな大災害の被害額というのは、今まで見たことが無く、人々の命だけではなく、経済にも大きく打撃を与えている事を知りました。総額９兆9000億という莫大な金額が、この災害によって失われている事を知り、大地震は、様々なところで強い影響を起こしている事を、改めて強く感じました。今後起ころうとしている南海トラフ大地震に備えて、十分に警戒しつつ、臨機応変な対応が出来る様になりたいです。

・今回の授業を通して私は「情報不足・混乱」というキーワードが心に残った。なぜこの言葉が印象に残ったか、それは近年が情報社会であるからである。私は「情報不足、混乱」についての印象的なエピソードがある。それは忘れもしない2011年の東日本大震災の出来事である。東日本大震災直後、SNSで「ライオンが動物園から逃げた」というものが写真付きで投稿された。この投稿は一気に拡散され、人々は自身の恐怖とライオンの恐怖に襲われた。しかしこの情報は嘘だったことが発覚し、これを投稿した犯人は逮捕された。この情報社会では嘘の情報と本当の情報が混在している。それらを見抜く冷静な力が必要である。しかし地震などの災害が起こった場合はどうだろうか。そのような冷静な判断は難しいだろう。そのためこのような過去の過ちの事件を学び、どんな状況にも対処できる人間になっていかなければならないと感じた。

・私が動画を通し心惹かれた言葉は「包括防災」である。私はまだ大きな災害を経験した事がなく、弱者の立場に目を向けて考える必要性に気づくことができなかった。災害時では高齢者や障害を持つ人など弱い立場にある人が必要な支援を受けられず、周りが気づかないうちに思い悩み孤立へと繋がる可能性がある。具体的に言うと体が不自由で車椅子を必要としている人は避難所において床に横になれない状態に陥る、高齢者では咀嚼・嚥下機能の低下に伴い支援物資で配られた冷たいご飯は水分がなく飲み込めない状態になる。以上の様なさまざまな視点から生じる課題を見出し、解決を図る事で命の平等を守れると考える。

・今回の動画視聴で、私は阪神・淡路大震災についてのグラフや表が載ってる動画を見て、地域の助け合いや交流がとても大事なものだということを改めて感じました。震災にあい、生き埋めになった人で自力で抜け出せる人もいるが、自分ではどうにもならない場合、必ず共助の助けが必要な場合がきます。グラフを見ると自力で抜け出した人以外、家族や友人、隣人の助けで脱出した人が過半数を占めていました。今までの地域の支え合いが一丸となるため、重要であると思いました。電話の回線が切れ、思うように救助が来ない場合、どうしても身近での支えが必要となります。今回の動画から地域間のコミュニケーションが思いがけない非常事態時にいかに大事であるかがわかりました。

・生き埋めになった人が誰に助けられたかという場面で、自力や家族、友人、隣人に助けられたという人が合計95%だったことにとても驚いた。それに対して救助隊は２%だった。私は生き埋めになっている人は救助隊が助けているものだとイメージしていたが、よくよく想像してみると災害の現場でタイミングや状況を考えたとき、助けが必要な人を助けられるための力や可能性を１番持っているのは救助隊ではなく、その時その現場に一緒にいる市民たちなのだと感じた。そういう意味でも、災害時、被災者は被災者であると同時に救助隊以上の力を持った、「助け合いの精神を持った人たち」になるのかなと思った。

・自分を守ること、他人を守ること、それらは確実に循環し、人々の心に染みついているのだと思う。危機的状況で自分を守ると同時に、助け合い、守り合うことのできる人間の心は素晴らしいと思った。

・私が映像を見いるときに印象に残った言葉は「災害弱者」というものである。なぜこの言葉を選んだのかについて考えていきたいと思う。私のような若者であっても阪神・淡路大震災について映像や人の話から知ることはあった。そこで主に取り上げられることはその甚大な被害や避難の仕方などである。その当時の様子を知らない私には避難後述べた問題にまでなかなか頭が回らなかったのだ。もちろん全くそんな話を聞いたことがなかった訳ではないが、災害弱者の存在や実際の数値についてここまで詳しく聞くのはおそらく初めてだ。すなわち、私はそんな人達も取り残さない包括防災の考え方に心惹かれたのだ。

・今回の動画を見て心を惹かれたところ、興味を持った場面は二つある。理由はともに、今まで当たり前と考えていたことが、当たり前ではなかったのだと再認識したからである。一つ目は、ライフラインの復旧についてです。阪神淡路大震災という大きな災害を受け、ライフラインは6,000億円という計り知れない金額の損害が出たという事実に驚いた。二つ目は、避難先での生活上の問題についてです。衛生状態の悪化、医療サービスの不足などは、将来医療関係者となる私たちも今から、不足の事態を想定して考えておくべきなのではないかと思った。最後に、はじめに述べたように、今私たちが当たり前だと思っていることは、予想していない時に急に崩壊しまうかもしれないので、準備や、今できることをしておくべきだと再認識した。